



占術師アキラV  
message in Montreal  
メッセージ イン モントリオール  
著 橋本昂祈

目次

1	モントリオールの風と、秘めた想い	1
2	ターニングポイントと星の巡り	2
3	届かない熱と鳴らないスマートフォン	3
4	日比谷の空、狂気のピアノ	4
5	サムワントゥウォッチオーバーミー	5
6	星崎詩音の影	8
7	終わらない雨と守るための嘘	10
8	占術師の呪縛 祈織が残したもの	13
9	同じ屋根の下の二人	16
10	異国のBARとフラれた女のビール	21
11	迷子の夜、遠くからのメッセージ	23
12	ずるい優しさと淡い交差点	26
13	はじめましての挨拶とカフェでの決着	30
14	「さよなら」の代わりに言葉	34
15	ダサくて臆病な男の不器用な約束	36
16	メッセージ イン モントリオール	39
17	天地徳合 占いの行方は	41
18	祝福のワルツ	47
19	ブルノートNYの熱	51

20	ワルツ・ア・モントリオール	20
21	魂のレゾナンス	21
22	夢のワルツ	22
	あとがき【ワルツ・ア・モントリオール】について	62

## 1 モントリオールの風と、秘めた想い

「涼子、ずっと君だけを見つめてきた。そして、今日までずっと…」

大谷祐介は長年秘めてきた想いを伝える。

涼子は無言のままうつむく。

祐介は言葉を続けた。

「オレはお前を愛してる」

祐介が言う。

夕暮れに染まる街。そよ風が吹き抜けていった。

藤原涼子は目頭が熱くなる。

「祐介、ズルいよ…。こんな場所まで追いかけてきて…。お仕事は大丈夫なの？」

「ああ。仕事なら辞めた」

「どうして？」

「オレはやっぱギターがやりたい。例え、フリーターになろうとも、いつか、お前と一緒にステージに立てるなら本望だ」

祐介の言葉に涼子は無言を貫く。

古都モントリオールにはジャズが流れていた。

涼子が意を決して口を開こうとした瞬間

「わかってるよ。お前には好きな人がいることくらい。でも、せめて今日だけは忘れてくれないか…」

祐介は涼子を強引に抱きしめた。

## 2 ターニングポイントと星の巡り

「アキラ先生。私の恋愛はどうなりますか？」  
薄暗い鑑定室にて、優子は言った。

クラリアントの佐藤優子は、1981年4月28日生まれ。A型。

「優子ちゃん。先生はやめようよ。いつも通りアキ君でいいよ」

苦笑いを浮かべアキラは言う。

「じゃあ、アキ君。彼はいま、どんなことを考えている？ 私のことどう思ってる？」

優子はアキラの袖をつまみながら言う。

「さあ、さすがに神じゃないから、何を考えてるのかはわからない。解らないけど…」

「けど？」

優子は不安な表情を浮かべた。

アキラは続けた。

「今、祐介くんは人生のターニングポイントを迎えている」

「ターニングポイント…」

「そう。闇の7年間を抜けて大事な決断をすることになるはずだ」

「まさか、結婚？」

「それは、まだ少し早いと思う。彼はサラリーマンやりながら音楽の道も捨てきれなかったのだよね。例えば、夢を追うために会社を辞めるとか大事な決断を迫られる。そのような星の巡り」

「良かった…。祐介にはギターを諦めて欲しくなかった。実は彼、はじめから40歳過ぎたらバンドやりたいて夢を持ってサラリーマンしてた。40歳まではお金を貯めたかったみたい」

「そうなんだね。四柱推命では、正財という財に恵まれる星を持つてるからお金にはかなり真面目。困らないはずだよ」

アキラは言って微笑んだ。

優子は自分が褒められたような気がしてハニカムような笑みを浮かべた。

「アキ君は、いい女性じゃないの？」

「いない、と言えば嘘になる」

「えー！ どんな人？」

「ピアノに人生を賭けてる女さ」

アキラは言って窓の外を眺めた。

「いーなあ。その人。アキ君はモテるからイチコロじゃないかな」

「そんなことないよ。オレなんかの彼女にするにはもったいない。裕福な育ちで経歴もピアノの実力も立派な女性だから。それに…」

アキラはいつになく弱気な発言をした。

「アキ君。あの事件のことならば、いい加減忘れましょうよ。アキ君だって被害者なのだから…」  
優子はアキラの手を優しく包んだ。

### 3 届かない熱と鳴らないスマートフォン

窓の外には、青くライトアップされたノートルダム大聖堂が見えていた。遠くにはセント・ローレンス川が、街の灯を揺らしながら鈍く光っている。旧市街の石畳を歩き交う人々の足音が、微かに夜気を伝って届いていた。青い光は古い赤レンガの凹凸に深い影を落とし、部屋に重厚で官能的な空気を生んでいた。ヨーロッパのような異国情緒に満ちた街、モントリオール。

祐介は窓を閉めた。外の音が遠のき、部屋にはジャズだけが残る。

グレーの大理石と、フレームのない分厚いガラス張りのシャワーブース。そこからは、雨のような水音が絶え間なく響いていた。温かな湯が肩から背中を伝い、白い湯気が洗面台の大きな一枚鏡を曇らせている。ガラス越しに見える涼子の身体は華奢なのに、濡れた曲線だけが妙に女らしく際立っていた。年齢を感じさせない腰のくびれ。曇った鏡に、涼子は繊細な指先をそっと這わせた。

祐介は硬い椅子に座っていた。

ブランデーの入ったグラスを弄りながら、氷の溶ける微かな音に耳をすませる。あの遠い夏の日の出来事に想いを馳せる。涼子とはじめて出逢った日。品川の喫茶店。今と同じようにジャズが流れていた。まだ、初々しく金髪のギャルメイクした涼子がオーダーを取りに来た。はじめは、濃いメイクをケバいと感じた。だが、その奥にみせた瞳の輝きにすぐ気づいた。衣装や髪型で不真面目を演じてても、彼女の内面世界は隠しきれいていない。もっと彼女のことを知りたい。祐介は知らぬ間に恋の沼に落ちていた。シャワーの音が止んだ。静寂が下りた直後、ガラスの扉が開く擦過音が部屋に響く。

湯気と共にバスルームから現れた涼子は、白いバスローブを身に纏い、濡れた髪の毛先から水滴を落とすように濡れていた。

「お待たせ」

普段の彼女からは想像もつかないほど、その声は低く、甘く掠れていた。祐介はグラスをテーブルに置き、ゆっくりと立ち上がった。理性の糸が、音を立てて切れるのが分かった。

一歩、また一歩と涼子に近づく。

湯上がりの甘い匂いと、濡れた髪先から落ちる水滴に、祐介はもう抗えなかった。

「涼子……」

名を呼ぶ声は、自分でも驚くほど熱を孕んでいた。

祐介は彼女の肩を抱き、確かめるように唇を重ねた。

だが次の瞬間、涼子の身体が小さく震えた。触れた頬が、濡れていた。

「ごめん……」

涼子は祐介の胸をそっと押し返し、うつむいたまま唇を噛んだ。泣いている。

祐介が言葉を失っていると、ベッド脇に置かれたスマートフォン画面が淡く光った。

涼子はそれを隠すように手に取り、ほんの一瞬だけ視線を落とす。

画面には、アキラの名前と、返信されないままのメッセージが残っていた。

祐介は、その小さな光だけで、自分が今どこに立っているのかを思い知らされた。

#### 4 日比谷の空、狂気のピアノ

東京の空は、ねっとりとした夏の湿気を孕んでいた。見渡す限り青空が広がる日比谷音楽フェス。木々の揺らめき。緑の薫りがしていた。

吹き抜ける風に乗って、野外ステージからアップテンポなプラスチックの音が響いてくる。プラスチックのカップに入った生ビールの水滴が、アキラの指先を濡らした。

「アキ君、ジャズって生で聴くとぜんぜん違うね！」

人ごみの中で、優子が少し声を張り上げて言った。彼女の視線はステージに向けられているが、その横顔にはどこか、遠いモントリオールにいるはずの男の影を探しているような寂しさが滲んでいた。

「ジャズが好きだったのは、彼の方だろ？」

「アキラがわざと意地悪に言うのと、優子はびくっと肩を揺らし、恥ずかしそうに笑った。

「先生、占いじゃないんだから当てないだよ」

「顔に書いてある。でも、たまには自分のために音楽を聴くのも悪くないさ」

アキラは笑って、冷えたビールを喉に流した。

その時、ステージの曲調が変わり、激しいピアノのソロが始まった。

力強く、狂気の気配さえ纏った鍵盤の音。

アキラの指先がピクリと動く。その音は、どうしても『彼女』の弾くピアノを連想させた。裕福な育ちでありながら、身を削るようにピアノに向かっていった涼子。そして、アキラの人生を大きく変えたあの事件。

(モントリオール……)

晴れ渡る日比谷の空の下で、アキラの心だけが一瞬、冷たい石畳の街へ飛んでいた。

## 5 サムワン トウウオッチ オーバーミー

「なあ、涼子」

セント・カトリック通りのカフェテラスを出てすぐの角で、祐介は立ち止まった。夕方の光がビルのガラス壁に反射して、街全体が薄いオレンジ色に染まっている。車のクラクションも、人のざわめきも、どこか浮き足立っていた。

「ん？」

コンビニコーヒーのカップを片手に、涼子が振り返る。風に揺れた黒髪が、肩のあたりでかすかに跳ねた。

「今夜さ、ジャズフェス行かないか」

「フェス？」

涼子は片眉を上げる。

「ほら、オールドポートの方でやってるって言ってたろ。モントリオール・ジャズフェスティバル。世界中のプレイヤーが集まる、あれ」

「……仕事、いいの？」

「もう辞めたって言ったじゃん」

祐介は照れたように笑って、頭をかいた。

「今のオレの仕事は、ギターと——」

言いかけて、言葉を飲み込む。

その代わりに、コーヒーのカップを軽く掲げた。

「せっかくモントリオールまで来たんだしさ。観光らしいこと、一つくらいしようぜ。音鳴ってる間だけは、いろんなこと忘れられるかもしれないし」

涼子は少しだけ視線を落とし、カップのふちを指先でなぞった。

「……そうだね」

短く言って、ふっと笑う。

「じゃあ、案内してもらおっかな。こっちの地理、まだよくわかんないし」

「任せとけ。昨日、地図アプリと睨めっこしながら、下見したから」

「準備いいなあ」

涼子の笑い声が、夕刻の空気に滑っていった。

\*

夜のオールドポートは、昼間とは別の顔を見せていた。石畳の道は、屋台の灯りとネオンで淡く照らさ

れ、空には薄い雲がかかっている。セント・ローレンス川の方から湿った風が吹き上がり、グリルされた肉の匂いと、甘いキャラメルポップコーンの香りを運んでくる。広場の中央には大きな特設ステージが生まれ、黒い幕の向こうでスタッフが慌ただしく動いていた。周囲にはいくつもの小さなステージも点在していて、それぞれ違うバンドが演奏している。

「すごい……」

涼子が息を呑む。

「ね？ 日本のジャズフェスともまた違うだろ」

祐介は、彼女の横顔を盗み見る。

瞳が、子どものようにきらきらしている。

「とりあえず、メインステージの方行ってみようぜ。さっき張り紙で見たけど、今から出るの、有名なピアニストらしい」

「へえ」

涼子は、ほんの少しだけ姿勢を正した。

「有名なピアニスト」という言葉に、身体が無意識に反応している。

二人は人ごみを縫うように進んだ。

周囲では、プラスチックカップに注がれたビールを片手に、リズムに身を任せている人々が大勢いる。

恋人同士らしいカップルが肩を寄せ合い、子どもを肩車する父親の姿もあった。

「ビール、飲む？」

祐介が屋台の列を顎で示す。

「……一本だけ」

「了解。ここで待ってて」

祐介は屋台へ駆けて行った。

涼子は人の流れから少し外れた場所で立ち止まり、ステージを見つめる。

照明テストの白い光が、空へ向かって鋭く伸びていく。

(アキラなら、こういうところ、何て言うかな)

ふと、頭の片隅で名前が浮かんだ。

すぐに振り払うように首を振る。

今は考えるべきじゃない——そう自分に言い聞かせる。

「お待たせ」

祐介が戻ってきた。

氷で濡れた二つのカップを差し出す。

「サンテ（乾杯）だっけ？」

「サンテ、ね」

二人はカップを軽く合わせた。

プラスチック越しに、ほんの少しだけ指が触れる。

その瞬間、ステージの照明が一斉に落ちた。暗闇の中で、観客のざわめきが膨らみ、やがて静まる。真ん中にスポットライトが落ちる。黒いスーツ姿のピアニストが、ゆっくりとステージ中央に歩み出てきた。歓声と拍手が一斉に上がる。

「Ladies & gentlemen——」

司会者の英語の声が響き、紹介が短く続く。

しかし、涼子には言葉の細部は耳に入ってこなかった。

視線は、ピアニストの指先と、ピアノの蓋にだけ集中していた。

最初の一音が、夜空を切り裂いた。

低く、重い和音。

すぐに右手のフレージが絡みつき、リズム隊が後ろから追いかける。

テンポは早く、しかし丁寧に刻まれ、音の粒が石畳の上で弾けるようだった。

「すげえ……」

祐介が思わず漏らす。

その横で、涼子は一言も発せず、ただじっとピアニストの手元を見つめていた。目の奥で、何かが燃えている。曲はアップテンポなビバップから、ミディアムのブルースへ、そしてしっとりとしたバラードへと流れていく。観客はビールを飲みながら揺れ、誰かが小さく口笛を吹き、遠くで子どもが笑う。そのすべてを包み込むように、ピアノが鳴り続けている。

三曲目の終わり、ピアニストは突然、ソロで静かなイントロを弾き始めた。一音一音を、丁寧に確かめるようなタッチ。それは、どこかで聴いたことのあるスタンダードだった。

『Someone to Watch Over Me』……c.』

涼子が小さく呟く。

「知ってる曲？」

「うん。昔、よく弾いていた」

ピアノの音が、夜空に溶けていく。

メロディは優しく、少し切ない。

「どこかで、私を見守ってくれる誰か」を願う歌だ。祐介は、隣にいる涼子を横目で見る。彼女は、ステージではなく、どこか遠い場所を見ているような目をしていた。

「なあ、涼子」

「なに」

「……今、誰のこと考えてる？」

問いかけは、冗談めかしていた。

だが、自分でも声が少し震えているのが分かった。涼子はすぐには答えなかった。その代わりに、カップを持つ手に力を込める。

「音楽のことだけ、考えちゃダメ？」

そう言って、彼女は笑った。笑顔なのに、どこか頼りない笑みだった。

「ダメじゃないよ」

祐介は、カップを口元へ運び、冷たいビールを一気に流し込んだ。喉の奥に、アルコールと一緒に、何か重たいものが引っかかる。

（それでも、今夜だけは——）

ピアノがサビへと向かう。いつか見守ってくれる人が現れると歌うように。涼子は、そっと祐介の方へ肩を寄せた。ほんの数センチの距離。それだけで、祐介の鼓動は、ステージ上のドラムと同じ速さで打ち鳴らされていた。

遠くで火花が上がる音がした。音楽と歓声、ビールの匂いと川風。モントリオールの夜が、二人を呑み込んでいく。

## 6 星崎詩音の影

雨上がりの東京は、アスファルトから立ちのぼる湿気と、排気ガスの匂いが混じり合っていた。仕事を終えた優子は、駅から少し速回りをして歩いてきた。アキラの鑑定室で「祐介はターニングポイントにいる」と聞かされてから、まっすぐ家に帰る気になれなかったのだ。傘はもう畳んでいる。濡れた路地にネオンの光が滲み、マンホールのふちを細く光らせている。スマートフォン画面には、さっき撮った日比谷フェスの写真が残っていた。青空とステージと、生ビールを掲げるアキラの横顔。

（祐介、今頃どうしてるかな？）

優子は画面を消し、溜め息をひとつ吐いたときだった。背後で、足音がした。こんな時間に、この細い路地を歩く人間は多くない。優子はなんとなく肩をすくめ、歩く速度を少しだけ速める。それと同じタイミングで、足音も速くなる。

（気のせい……だよな）

振り返る勇気は出ない。優子はコンビニの看板の方へ向かって曲がった。店内の明かりが見えるだけで、少し安心できる気がしたからだ。しかし、曲がり角を折れたところで、誰かとぶつかりそうになった。

「きゃっ」

細い悲鳴が漏れる。目の前に、黒い傘がすっと差し出された。優子は思わず一歩下がる。

「佐藤優子さん、ですわね」

低い声だった。男とも女ともつかない、よく通る声。黒い傘の陰から、端正な輪郭だけがぼんやり浮かび上がっている。街灯が、その輪郭の片側だけを白く照らしていた。

「……どなたですか？」

優子は、手に持っていたバッグを持ち直した。指先に、じんわり汗が滲む。

「急にすみません。少し、お話したいことがあります」

その人物は、ゆっくりと傘を傾けた。濡れていないトレンチコート。整った髪。年齢は三十代前後か。柔らかい微笑みを浮かべているのに、目だけが笑っていないかった。

「宗教の勧誘とかなら間に合ってます」

優子は精一杯、軽口を叩く。

「そういう類いではありません。あなたの——」

少し間を置いて、その人物は言葉を選ぶように続けた。

「——先生のことについて、です」

「先生……？」

一瞬、脳裏に別の人物の顔が浮かびかける。しかしすぐに、「アキラ先生」の方だと理解する。

「橋本アキラさん。占い師をされている」

名前をはっきり口にされて、優子の背筋が冷たくなる。

「ご存じですよね？」

「あの……あなた、アキラ君の知り合いですか？」

「知り合い、というほど綺麗な関係ではないかもしれませんが」

男とも女ともつかない声が、少しだけ楽しそうに笑った。雨上がりの空気の中で、その笑い声だけが乾いている。

「いま、彼の周りで起こっていることに、あなたが巻き込まれないか心配で」

「巻き込まれる？」

嫌な単語だった。優子は無意識に一步退く。それに合わせて、相手も同じだけ距離を詰めてくる。距離は変わらない。

「彼は優しい人でしょうか？」

「……はい」

「だからこそ、過去に踏み込もうとする人間を拒めない。自分が傷つくのは構わなくても、他人が傷つくのを一番嫌うタイプです」

相手は、まるで昔からアキラを知っているかのような口ぶりだった。

「あなたのことも、きっと守ろうとするでしょう。ただ——」

言葉がそこで切れた。

優子は知らず知らずのうちに喉を鳴らしていた。

「ただ、彼の過去には、触れてはいけない領域がある」

「過去……あの事件のこと、ですか」

優子はいく口にしてしまった。あの鑑定室で、それとなく聞かされた事件の話。詳細は知らない。けれど、アキラの笑顔の裏にいつも影としてちらついているもの。黒い傘の下で、その人物の目がゆっくりと細くなった。

「そう。その事件だ」

路地に、冷たい風が滑り込んだ気がした。誰かが遠くで車のドアを閉める音がする。

「……あなた、誰なんですか。本当に」

優子が絞り出すように言うと、その人物は初めて名乗る代わりに、別の名前を口にした。

「星崎詩音、という名前を聞いたことはありませんか」

耳の奥で、何かがちり、と鳴った。

「ほしぎき、しおん……?」

聞き覚えはない。だが、その音の並びだけで、胸の奥がざわつく。どこかで、アキラが一度だけ口にしかけて、飲み込んだ名前のような気がした。

「あなたが、その名前に興味を持つ必要はありません」

穏やかな声のまま、相手は言った。

「ただ、忠告はしておきます。橋本アキラの過去を、これ以上掘り返さないこと。あの人は、もう十分罰を受けている。これ以上、誰かが巻き込まれる必要はない」

「巻き込まれるって……具体的に、どういう——」

優子が問い返そうとした瞬間、コンビニの自動ドアが開き、明るい店内の光とポップな音楽が路地に溢れた。数人の客が笑いながら出てきて、その流れに視界を遮られる。

「ちょ、ちょっと待って!」

慌てて前を見ると、黒い傘の人物は、もういなかった。雨上がりの路地には、水溜りとネオンの反射だけが残っている。さっきまで立っていたはずの場所には、黒い傘も、足跡も見当たらなかった。

「星崎……詩音……」

名前を口の中で転がしてみる。それだけで、舌の上に薄い鉄の味が広がるような気がした。胸ポケットの中で、スマートフォンが震えた。画面には「アキラ」の名前と、新着メッセージの通知が表示されている。

『優子ちゃん、さっきはありがと。無事家に着いた?』

いつもの柔らかい文面。それなのに、優子の指はすぐには画面に触れられなかった。

(星崎詩音。あの人は、誰……?)

雨上がりの空に、低く雷が鳴ったような気がした。優子は震える指で、ようやく「大丈夫だよ」と短い返信を打ち込んだ。送信ボタンを押したあとも、「星崎詩音」という名前だけが、消えないノイズのように頭の中で鳴り続けていた。

## 7 終わらない雨と守るための嘘

「詩音……」

アキラは、その名前を一度だけ口の中で転がしてから、静かに息を吐いた。鑑定室の窓の外では、細かい雨が紫陽花の花びらを濡らしている。テーブルの上には、いつものノートパソコンと、四柱推命の命式表、それから優子が昨夜差し入れてくれたコンビニスイーツの空き容器が並んでいた。昨夜遅く、「変な人に声をかけられた」と優子からメッセージが届いたのは、ちょうど鑑定の合間のことだった。

『大丈夫?』と返しながら、胸の奥にひやりとした感覚が広がっていくのを、アキラは誤魔化せなかった。(やっぱり、向こうも動き始めたか)

パソコンの画面には、防犯カメラの映像が映っている。鑑定室のビルの出入口と、近くの路地に設置した簡易カメラの映像だ。画質は決してよくない。だが、昨日の夜、優子が歩いていた時間帯を早送りで追っていくうちに、黒い傘の人物の後ろ姿が一瞬だけ映り込んだ。顔ははっきりとは見えない。けれど、肩の傾き、歩幅のリズム、傘の持ち方——そのいくつかの要素が、アキラの記憶とぴたりと重なる。

「やっぱり、あの一派か」

画面に映る影に向かって、ぼそりと呟く。アキラはパソコンを閉じ、机の上のスマートフォンを手を取った。短い番号を押す。呼び出し音が三度鳴ったところで、くぐもった男の声が出た。

『もしもし』

「お久しぶりです、刑事さん。橋本です」

『おお、橋本くん。どうした、珍しいな』

電話の相手は、かつて「あの事件」の際に担当刑事だった男だ。事件が片づいてからも、アキラは時折、彼に鑑定のアドバイスを求められ、ゆるく繋がりが続いていた。

「すぐに解決しそうな、ちょっとした採め事がありましたね」

『採め事?』

アキラは、昨夜優子が遭遇した出来事を、できるだけ淡々と話した。

黒い傘の人物、アキラの名前を出されたこと、「星崎詩音」という名前。電話の向こうで、男が小さく舌打ちをする。

『まさかまたあいつらか……。いい加減にしてほしいもんだな』

「やっぱり、そちらでも把握してる相手なんですね」

『ああ。詳しくは言えませんが、こっちでも動向はマークしてる。橋本くん、君は何もしてないよな? また勝手に嗅ぎ回ったりとか』

「まさか。こっちは古いと原稿で手一杯ですよ」

アキラは肩をすくめる。本当に、嗅ぎ回ってはいない。ただ、あちらが勝手に「忘れるな」と言ってくるだけだ。

『その佐藤さん、だっけ? とりあえず、しばらくは一人で夜道を歩かないように伝えてくれ。こっちでもパトロール強めておくから』

「助かります」

『星崎詩音の件は、もう終わった話だ。君もそろそろ、過去から足を抜いた方がいい』

「それが出来れば、先生いりませんよ」

わざと軽口を挟むと、電話の向こうで男が苦笑した。

『まったく、口の減らない占い師だな。じゃあ、また』

通話が切れる。アキラはスマートフォンを机に置き、しばらく天井を見上げていた。(終わった話、ね) そう割り切れたら、どれだけ楽だっただろう。

\*

数時間後、優子は鑑定室にいた。

「……で、警察の人がパトロール強めてくれるって？」

「うん。だから、あんまり怖がりすぎないで」

アキラは湯気の立つコーヒーカップを優子の前に置いた。優子は両手で包み込むように持ち、ほっと息をつく。

「でも、アキ君。あの人が、本当に変な感じだったよ。あの人はもう十分罰を受けている、とか、これ以上、誰も巻き込まれなくていいとか……」

「それは、アイツらの都合のいい言い分だよ」

アキラは、あくまで淡々とした声で言った。

「あの件は、もう司法的にはケリがついている」

「でも、アキ君、いつも言ってるもん。僕だって被害者なんだよって」

優子が口にした言葉に、アキラは一瞬、目を伏せた。

コーヒーマシンの表面に、窓の外の雨粒が逆さまに映っている。

「被害者であり、加害者でもあったのかもしれない、って話さ。オレは愛する女を見殺しにした。何があっても許されない。神だってそう思うはずさ」

「そんなの——」

「優子ちゃん」

アキラは、あくまで穏やかな笑みを浮かべた。

「詳しいことは、まだ言えない言ったら、君も知ってしまった人になってしまいうから」

「知ってしまった人……？」

「世の中には、知らない方がいいこともあるんだよ」

独り言のように呟く。自分で言いながら、その言葉がいかに逃げ口上めいているか、アキラ自身が一番よく知っていた。頭の奥に、古い映像が浮かぶ。薄暗い練習スタジオ。汗とタバコの匂いが混じった空気が。ピアノの前に座りジャズを歌う一人の女——星崎詩音。

白い指。鍵盤を叩くたびに揺れる、長い髪。彼女の弾く音は、美しく、そして危うかった。透き通るほど美しい声を持っていた。ギャルのような風貌からは信じられないほど今にも壊れそうなガラス細工のような心。

——「ねえ、アキラ。私、詩音のこと、許せないんだ」

涼子の声。隣で腕を組みながら、冷たく笑っていた顔。あんなにも運命を感じた恋人は、呆気なく空へ旅立った。全てオレのせいだ。オレが詩音を殺したに等しい……。この罪の十字架を背負い詩音のために後を追うことも考えた。涼子が異変に気づいてくれなければ、オレは……。

「アキ君？」

優子の声に、アキラは現実引き戻された。

「…ごめん、ちょっと考えごとした」

「もしかして…：詩音さんって、そのピアノに人生を賭けてた人？」

優子の問いに、アキラは小さく首を横に振った。

「違うよ。ピアノに人生を賭けてる女は——今も、モントリオールで生きてる」

窓の外の雨脚が、少し強くなった。遠くで雷の音が小さく鳴る。

「じゃあ、星崎詩音って…：」

「そこから先は、いづれちゃんと言すよ。詩音のことも、ピアノの女のことも。俺と、あの事件のことも」  
アキラは、優子の目をまっすぐ見た。

「だから、それまでは——あんまり一人で遅くまで出歩かないこと。星崎詩音の名前を、むやみに口にしないこと。約束してくれる？」

優子は少し唇を噛んでから、こくりと頷いた。

「…：分かった。約束する」

「ありがとう。僕が守るから」

アキラは、いつもの「先生の笑顔」を浮かべる。優子の手元に視線を落とすと、彼女の指がまだかすかに震えているのが見えた。

（守るって、約束してしまったな）

自分に向けて苦笑する。窓の外では、雨がただ静かに降っている。その雨音は、あの日も同じようにスタジオの窓を叩いていた。星崎詩音が最後に弾いた曲のタイトルだけが、今もアキラの中で鮮明に残っている。

「Montreal」

遠い街へのメッセージ。

それでも——

星崎詩音の残した音が、そして涼子の選択が、自分の中で終わらないまま鳴り続けていることを、アキラは誰よりもよく知っていた。

## 8 占術師の呪縛 祈織が残したもの

「…：だから、俺はもう結婚しないって決めてる」

そう言って笑ったときのアキラの顔は、いつもの軽口とは少し違っていた。深夜のBAR。カウンターに向こうでは、終電を過ぎても帰らない客たちに、薄めのハイボールが量産されている。竹田はグラスを傾けながら、隣に座る友人の横顔を盗み見た。

「占い師が、決めてるなんて言うとか、なんかフラグっぽいけどな」

「おいおい。そこは、運命には逆らえないって言ってほしいところだろ」

アキラは苦笑し、ピーナッツをひとつ口に放り込んだ。水の溶けかけたロックグラスが、カウンターの木目に薄い輪を描いている。

「理由は二つある」

「二つ？」

「ひとつは、もう知ってるだろう。星崎詩音の件だよ」

竹田は無言で頷いた。あの事件について、細部までは知らなくても、アキラが未だにあの夜の雨音を引きずっていることは分かっている。

「もうひとつは？」

アキラは少しだけグラスを揺らし、琥珀色の液体を見つめた。

「月下の占術師の話、覚えてる？」

「お前が書いた私小説のことか？」

「そうそう。あのミステリー小説が腐ったようなハーレムの物語」

竹田の頭に、ぼんやりとした記憶がよみがえる。京急蒲田駅近くにあった、古いビルの一室。満月の夜、薄灯りがともる夜だけ、アキラが営業していた鑑定室。

「祈織って女がいたんだ」

アキラは、名前を口にするときだけ、少し声を落とした。

「いのり……？」

「漢字は、祈るに織るって書く。事件に巻き込まれやすい運命の女だった」

「お前の元カノ？」

「元カノって言うほど、ちゃんとしてなかったかもしれない」

アキラは自嘲気味に笑った。

「最初は、友人の紹介だったよ。月下の占術師に書いたが、地元で事件に巻き込まれて、沖縄へ逃避行した。事件と言っても修学旅行みたいな子供遊びだったが、客と占術師の一線を越えてしまった。うっかり肉体関係を持ってしまった。でも、恋人ではないような、そんな関係」

祈織の姿が、アキラの脳裏にはっきり浮かぶ。黒髪のショートヘアを後ろでひとつにまとめ、白いブラウスに黒いスカート。飾り気のない服装なのに、なぜか目を引く女だった。

「事件が解決してオレが東京に戻ってきたときには、まだ甘い関係でいられた。けど、祈織は新しい生命を宿していた。しかも、二人分な」

「双子か」

竹田が、本題を促す。

「ああ」

アキラは、グラスを置いた。水がカランと小さな音を立てる。

「ある日、祈織が言ったんだ。ねえアキラ、私たち、結婚はしない方がいいと思うって」

「いきなりだな」

「彼女は、いつも唐突なんだよ」

アキラは苦笑しながら続けた。

「理由を聞いたら、アキラと私は、夫婦になる運命じゃないからってさ」

「実際に占いでしょ？」

「ああ。残念ながら運命と呼ぶには縁が遠い星まわりだった。でも、オレは真剣だった。本気で祈織との新しい生命を守ろうとした。そのために、小説家になる夢を捨てても構わない覚悟だった。でも、その時点で、すでに祈織は分かっていたのだろう。オレが夢を捨てる覚悟でいることを。しばらくは、仲睦まじい日々が続いた。察室でエコー写真を見たとき、祈織は笑っていた。「見て、二人いるよ。賑やかになるね」なんて嬉しそうに。けど、数週間後、祈織はいなくなった」

「いなくなったって？」

「文字通り、姿を消した。引越し先も、実家も、全部フェイクの情報残して」

アキラは、カウンターの木目を指でなぞる。

「置き手紙だけあったよ。あなたが愛しているのは私じゃない。私は私の運命を自分で選びますって」

竹田は、グラスをそっとカウンターに置いた。

「……それ以来、消息不明か」

「うん。時々、風の噂みたいにな、どこかで看護師として働いてるらしいとか、シングルマザーで頑張ってるらしいとか聞くけど、確証はない」

「探さなかったのか」

「探そうと思えば、占い師の人脈使えば見つかったかもしれない。でも、それって祈織が選んだ運命を踏みに行ることになるんじゃないかって、怖くなった」

アキラは、少しだけ笑った。

「そういうのを呪縛って呼ぶんだろ？」

「……結婚しない理由の二つ目が、それか」

「そう」

指を二本、カウンターの上に立てる。

「ひとつは、詩音の事件。もうひとつは、祈織と双子のこと。俺はもう、誰かの人生を背負う権利を簡単に主張できる人間じゃないって、思い知らされた」

竹田はしばらく黙っていた。

店内のスピーカーから、古いジャズスタンダードのピアノが流れている。

「でもさ」

ようやく口を開いたとき、その声はいつもより少し低かった。

「背負わないって決めたまま、その双子はどうなるんだろうな」

アキラは一瞬、目を閉じた。

「それが、俺の呪いだよ」

短く言って、グラスの残りを一気に飲み干す。

「だから、占いをやめられないんだ。自分の選択で誰かを傷つけたくないくせに、誰かの選択に口を出さずにはいられない。占いの呪縛」

竹田は、カウンター越しにボトルを指さした。

「もう一杯、いくか」

「そうだな。呪縛の話なんて、シラフでしていいネタじゃない」

二つのグラスに琥珀色の液体が注がれる。氷の音が短く鳴り、やがてバーはふたたび、他人の笑い声とジャズの音に溶けていった。アキラの胸の中でだけ、詩音の影。月下の鑑定室の暗い部屋と、祈織の笑顔、聞いたことのない双子の泣き声が、いつまでも消えずに鳴り続けていた。

## 9 同じ屋根の下の二人

モントリオール・トルドー空港の到着ロビーは、思っていたよりもごちんまりとしていた。ガラスの自動ドアが開くたびに、ひんやりとした外気が流れ込んでくる。東京のねっとりした湿気とは違う、乾いた冷たさ。

「はあ……着いちゃった」

優子はキャリーケースのハンドルを握り直し、深呼吸をひとつした。長時間フライトの疲れはあるけれど、足取りは軽かった。胸の奥で、心臓だけが落ち着かないリズムを刻んでいる。到着ロビーの人の波の向こうで、日本語の看板がちらりと見えた気がして目を凝らす。その瞬間、聞き覚えのある声が飛んできた。

「優子！」

顔を上げると、そこに祐介がいた。

コートの襟を立て、少し伸びた髪をニット帽で隠している。東京で会っていた頃より、ほんの少し痩せたようにも見えたが、その笑い方は変わっていなかった。

「祐介……！」

身体が勝手に前に出る。二人の距離が縮まり、キャリーケースがガラガラと音を立てた。

「おおっと」

祐介は慌ててハンドルを受け取り、そのまま軽々と引いてみせる。

「遠いところ、よく来たな。長旅お疲れ」

「うん……なんか、夢みたい」

優子は笑おうとしたが、自分の声が少し震えているのが分かった。

ロビーのガラス窓の外には、細かい雨が降り始めていた。灰色の空。滑走路を走る車両のライトが、濡れた地面に滲んでいる。

「寒くない？ コートいちおう持ってきたけど」

祐介は、自分の手にかけていた厚手のコートを差し出した。

「大丈夫、ありがと。でも、ちょっとだけ借りるね」

袖を通すと、ほのかにタバコと洗剤の匂いがした。懐かしいような、初めて嗅ぐような匂い。

「とりあえず、うち行こう。ホテル取った？ それとも今日はうちに泊まる？」

何気ない口調。

優子の胸が、どくと跳ねる。

(うち……)

当たり前のように言われたその一言の中に、期待が膨らむ。

「えっと……安いホテルは予約してあるけど、今日は顔見せに来ただけでもう十分だから」

「なにそれ、観光かよ。せっかくなこまで来たんだから、飯くらい奢らせろよ」

祐介はそう言って笑った。

その笑顔の奥に、ほんの一瞬だけ影が差したことに、優子は気づかなかった。

\*

空港から市内まではバスで移動した。窓の外を流れる看板の文字は、英語とフランス語。優子にはどちらも、映画のセットのように非日常に見えた。

「この街並み、好きだと思うよ、優子」

「もう好き。写真と匂いが全然違う」

ぼつり、と言葉が落ちるたびに、祐介は短く相槌を打つ。その様子が、どこかぎこちない。バスを降りて、地下鉄を乗り継ぎ、地上に出たときには、雨脚は少し強くなっていった。

石畳の路地。古い街灯。遠くに、ノートルダム大聖堂の尖塔がぼんやりと見える。

「ここから、うち、近いんだ」

祐介は、どこか言いにくそうに言った。

「え、いいの？ 寄っても」

「うん。……紹介したい人もいるし」

「紹介？」

優子は立ち止まりかけたが、祐介は歩みを止めない。

小さなアパートの前で足を止め、鍵を出した。古い木のドア。インターホンの横には、手書きのネームプレートが二つ並んでいる。

Y. OHTANI

R. FUJIMURA

優子の足元から、すっと血の気が引いていくのが分かった。

「……涼子？」

自分の口から、その名前が出たことに、優子自身が驚いた。祐介は、小さく肩をすくめる。

「そう。一緒に住んでる。——ごめん、先に言うべきだったな」

雨音が、急に大きく聞こえた。

(そうだよな。夢を追いかけて遠くの街まで来て。そばに誰かいない方がおかしい)

頭では理解している。理解しているのに、喉の奥が熱くなり、胸の奥がきゅゅと締め付けられる。

「ううん。……いいよ。紹介してよ、その人」

優子は、いつも通りの声を出したつもりだった。祐介が、ほんの一瞬だけ眉を寄せたことに、気づかないふりをする。ドアを開けると、廊下の向こうからピアノの音が聞こえてきた。柔らかくて少しだけ怪しいメロディ。

「ただいまー」

祐介が声をかけると、ピアノが止まり、椅子の軋む音がした。

「おかえり。雨、どうだった？」

裸足の涼子が、リビングの入り口から顔を出した。ゆるいスウェット姿。髪はラフにひとつにまとめている。ステージで見るジャズクイーンとは違う、素の表情。涼子は、優子を見ると、一瞬だけ目を丸くし、それから微笑んだ。

「こんにちは。藤原涼子です。祐介の……、えっと、ルームメイト兼ピアノ弾き」

「佐藤優子です。祐介とは、日本で同じ会社でした」

優子は、出来る限り自然な笑顔を返した。手を差し出され、握手を交わす。涼子の指先は、ピアニストらしく少し固く、温かかった。

（ああ、この人か）

何年前かに祐介に誘われて行った日比谷のフェス。ステージを見たとき、遠くからでも分かった華のある人。画面越しの動画で何度も見たピアノ。その現物が、目の前にいる。

「狭いところだけど、くつろいでいてください」

涼子がそう言って、キッチンへ消えていく。祐介は優子のキャリアケースを部屋の隅に置き、振り返った。

「とりあえずコーヒーでも飲む？ それともシャワー？」

「……祐介」

優子は、そこできちんと自分の限界に気づいた。このまま何事もなかったように笑って、近況報告だけして、「二人ともお似合いだね」と言ってしまうこともできる。できるけれど、それをしたら一生後悔する予感があった。

「ちょっと、外、いい？」

優子の声は、少し震えていた。祐介は、何かを悟ったように目を伏せ、コートを手に取った

\*

アパートの前の小さな公園には、誰もいなかった。雨は細くなり、街灯の光の中で斜めに落ちていく。ベンチに並んで座る。しばらく、二人とも何も言わなかった。先に口を開いたのは、優子だった。

「……彼女、綺麗だね」

「うん」

祐介は素直に頷いた。

「ピアノも、すごくて」

「うん」

「一緒に住んでるんだ？」

「うん」

短い相槌が、胸に刺さる。優子は、手のひらをぎゅっと握りしめた。

「祐介」

「なに」

「私、こっちに來たの、観光だけが目的じゃない」

「知ってる」

祐介は、やわらかく笑った。

「優子の友達から聞いた。ちゃんとケリつけたいんだろうなって」

「そっか。……祈織、余計なこと言うなあ」

優子は、少しだけ笑った。すぐに、真顔に戻る。

「祐介。私、ずっと、あなたのことが好だった」

雨音が、ふっと遠のいた気がした。

「会社の飲み会で、酔っぱらいながら、40になったらギターに戻るって本気の顔で言うところも、終電なくなつた夜に、変に期待させないでただギターの話だけしてくるところも、ボーナスの半分を機材につぎ込んで、残りをちゃんと貯金するところも」

一つ一つ言葉を重ねるたびに、胸の奥が熱くなる。

「夢から逃げるくせに、最後まで完全には手放さないとこも。全部、すごくダサくて、すごくカッコよくて。そういう祐介が、ずっと好きだった」

祐介は黙って聞いていた。横顔に、何度も見たはずの線が浮かんでいる。

「だから、直接言いたかった。夢、追いかけてくれてありがとうって。こっちで頑張ってる祐介を、見に來たよって」

優子は、笑おうとしたが、うまくいかなかった。

「でね。もしまだ誰もいないなら、あたし、隣で応援してもいい？ って言おうと思ってた」

沈黙の時間が流れた。

雨が、ベンチの下の小さな水たまりに輪を描く。

「……ごめん」

祐介の声は、驚くほど静かだった。

「ありがとう。そこまで言ってもらえる俺、ちょっとだけ自分を褒めてもいいかなって思うくらい、嬉し」

「うん」

「でも、今それを受け取ったら、きっと誰かを壊す」

「涼子さん、のこと？」

「それだけじゃない」

祐介は、空を見上げた。

灰色の雲の向こうに、何も見えない。

「俺、自分の夢だけでいっぱいいっぱいなんだよ。ギター戻って、ここで何とかやっていけるかどうか、毎日ギリギリで。涼子の夢も背負うって決めて、それだけで精一杯でさ」  
少し笑って、続ける。

「そこに優子の想いまで受け取ったら、多分、全部中途半端にする自信がある」

「中途半端にする、自信って何よ」

優子は、涙声でツッコんだ。

「……ごめん」

「謝らないでよ」

優子は、ぐいっと袖で目尻を拭った。

「分かってたよ、ある程度は。祐介がこっちに来いよって言わなかった時点で、多分そうなんだろうなって」

「言えなかった」

「言わなくて正解だったと思う。言われてたら、もっと面倒くさいことになってた」

二人とも、少しだけ笑った。

「祐介。フラれた記念に、一個だけ約束してくれる？」

「なに」

「いつか日本に戻ってライブやるとき、一番最初に連絡して。その時は、ちゃんと客席でただファンとして聴きに行くから」

祐介は、真面目な顔で頷いた。

「約束する」

「嘘ついたら、祈織やみんなに言いつけるから」

「それは怖いな」

今度は、二人ともちゃんと笑えた。

雨は、少しだけ弱くなっていった。

街灯の下で、細い雨の筋がゆっくりと降りてくる。

優子は立ち上がり、キャリーケースのハンドルを握った。

「泊まるよ、ホステルって言ってたよな。送ってくよ」

「いい。ここから歩けるし。今日は、ここまでで十分」

祐介は何か言いかけて、飲み込んだ。

「……ありがとう。来てくれて」

「どういたしまして。ちゃんと夢、叶えなさいよ。40になったらなんてケチなこと言わないでさ」

「おう」

優子は背を向けた。

振り返らないように、公園を出る。背中の方で、祐介が小さく息を吐く気配がした。振り返ってしまったら、泣きながら抱きついてしまいそうで、怖かった。石畳を打つ雨の音が、さっきよりも静かに聞こえる。

(これでいい)

胸の奥はちぎれそうに痛い。

それでも、どこかでスツと風が通ったような感覚もあった。

(ちゃんと好きだったって、言えた)

その事実だけが、モントリオールの冷たい夜気の中で、優子の身体をかろうじて支えていた。

## 10 異国のBARとフラれた女のビール

優子が、BARの扉を押しした瞬間、外の冷たい雨音が、分厚い木の板にさえぎられて遠のいた。代わりに、低くくぐもったベースと、シンバルをブラシで撫でる音が耳を満たす。カウンター席には、既に関人かの客が座っていた。年季の入った常連らしき老人。カップル。出張中らしいスーツ姿の男。誰も、場違いな東洋人の女に特別な視線を向けない。

(助かる)

優子は、濡れたコートを脱いで腕にかけ、カウンターの端の空いた席に腰を下ろした。木のカウンターには、グラスの輪染みがいくつも重なっている。

「何にしましょう？」

髭を蓄えたバーテンダーが、英語で尋ねてくる。

優子は、少し考えてから、指で四角を描くようにして言った。

「ビール。大きいので」

「かしこまりました」

やがて目の前に、大きめのグラスが置かれる。泡の層がゆっくりと落ちていくのを眺めてから、一口、喉に流し込んだ。冷たさが、胃のあたりを直撃する。さっきベンチで泣きそうになったときとは違う種類の痛み。

(フラれた女が、初めて異国で飲むビールってやつか)

自嘲気味に笑いそうになって、やめた。ステージでは、若いピアニストとベーシストとドラマーのトリオが、スタンダードを崩して遊んでいた。知っている曲なのに、ところどころ形が歪んでいて、酔った頭にはちょうどいい混沌だった。

二杯目を頼んだあたりで、隣の席がふっと空気を動かした。

「日本人？」

フランス訛りの英語だった。顔を向けると、黒縁メガネをかけた青年が、ビールを片手にこちらを見ていた。

「……ええ」

優子は拙い英語で答える。

「旅行？」

「少しだけ。あとは……友だちに会いに」

自分で言いながら、「友だち」という言葉が喉に引っかかる。青年はそれ以上突っ込まず、「いいね」と笑ってグラスを掲げた。

「いい音楽に、乾杯」

「いい音楽に」

軽くグラスを合わせる。それで会話は終わった。相手はステージの方へと視線を戻し、優子もまた、自分のビールに視線を落とす。（誰かに話した方が楽になるのかな）そんな考えが一瞬頭をよぎる。

「さっき好きな人にフラれたんだ」と、この見知らぬ外国人に言ってしまったら、少しは滑稽になって笑えるのかもしれない。けれど、その「好きな人」の顔を思い浮かべた瞬間、胸の奥がまたきゅっと締め付けられる。

（祐介。今頃、帰ってきてるかな。涼子さんと、ご飯食べてるかな）

二人が並んで食卓に座っている光景が、勝手に頭の中に映し出される。そこには、自分の席はない。

ビールの三杯目を飲み干した頃には、頭がぼうっと温かくなっていた。音が少し遠くなり、ステージと客席の境界が曖昧になる。

「もう一杯いかがですか？」

バーテンダーが英語で尋ねる。優子は一瞬迷ってから、首を横に振った。

「お水をください」

「いい選択ですね」

差し出された水を飲みながら、ふと気づく。

（私、ここまでして来たのに、何してるんだろ）

飛行機に乗って、時差ボケに耐えて、やっと会えた相手には、もう隣に大事な人がいた。それでも、告白したことを後悔はしていない。ただ、身体のどこかが、現実を追いついていないだけだ。ステージでは、バラードが始まっていた。静かなイントロ。ピアノが低い音を転がし、ベースがそれを支える。

（あ、これ……）

日比谷のフェスで、アキラと一緒に聴いた曲に少し似ている。あのときも、誰かのことを考えていた。今もまた、誰かのことばかり考えている。

「ホント、バカだよね」

日本語で呟く。隣の青年が振り向く気配はない。時計を見ると、いつのまにか日付が変わりかけていた。グラスの底には、もう何も残っていない。

「そろそろ戻ります」

バーテンダーに英語でそう告げると、「気をつけて」と短く返ってくる。

会計を済ませ、コートを羽織る。外に出ると、雨は細かい霧のように街灯の中を舞っていた。冷たい空気を吸い込むと、一瞬だけ頭がクリアになる。その代わりに、疲労がどっと押し寄せた。

（ホステル、どっちだっけ）

紙にメモした住所を取り出す。酔いが回った頭には、似たような石造りの建物がどれも同じに見えた。スマートフォン製の地図アプリは、バッテリー残量が心許ない。現在地の青い点が、ゆらゆらと揺れている。

（大丈夫。少し冷たい風に当たれば、酔いも醒める）  
自分にそう言い聞かせて、優子は夜のモントリオールの街へ踏み出した。胸の奥にはまだ、祐介の「ごめん」と、自分の「好きでした」が熱を持ったまま残っている。その温度と、外の冷気の差が、妙に現実感を奪っていくのを感じながら。

## 11 迷子の夜、遠くからのメッセージ

雨はいつの間にか止みかけていた。代わりに、モントリオールの夜気はぐっと冷え込み、石畳の路地を白い吐息が流れていく。

「こっち……で、合ってるよね」

優子は、紙に書いた住所と、スマートフォンの暗くなりかけた画面を交互に見た。地図アプリの青い点は、さっきからほとんど動いていない。さっき曲がるべき角を一本間違えたらしく、見覚えのない建物ばかりが並んでいる。

（やば。バッテリー残り、10パーセント……）

ホテルまでそう遠くはないはずだ。それでも、初めての夜の街で方向感覚を失うと、どこも同じように見えてくる。

遠くで笑い声があった。バーかクラブの前だろう。英語とフランス語が入り混じった陽気な声が、路地にこだまする。少しだけ心細くなったそのとき、背後から英語が飛んできた。

「ねえ、迷ってるの？」

振り返ると、さっきバーで隣に座っていた黒縁メガネの青年が立っていた。グラスを持っていない代わりに、手にはコンビニのビニール袋。

「さっきのバーにいたよね、日本人の女の子」

「あ……はい」

優子は安堵と警戒の入り混じった笑顔を浮かべる。知っている顔。とはいえ、さっき軽く挨拶しただけの他人だ。

「ホテル？ ホテル？」

「ホテルです。でも……道、ちょっと間違えたかも」

そう言って、紙のメモを見せる。青年はそれを受け取り、ふむふむと眺めた。

「うん、ここからそんなに遠くないよ。でも、このあたり、夜はあんまり安全じゃない」  
そう言うと、彼は軽く肩をすくめた。

「よかったら、一緒に歩こうか。角まででいいから」

(どうする……?)

頭の中に、いくつかの情報がよぎる。

・ここは海外

・夜

・初めて来た街

・そして自分は、心も足元も、少しふらついている

「大丈夫です。ありがとうございます。道だけ教えてもらえますか？」

優子は、出来るだけ丁寧な英語で断った。青年は、少しだけ肩を落とし、それでも親切そうな笑顔を崩さない。

「わかった、問題ないよ。じゃあ、こっちにまっすぐ行って、二つ目の角を左。そうすると大きな赤い看板が見えるはず。ホステルはその近く」

「二つ目を左、大きな赤い看板……」

「そう。ほんとに大丈夫？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

軽く会釈をして、優子は教えられた方向へ歩き出す。背中に青年の視線を感じたが、振り返らない。

(大丈夫。大丈夫。こういうとき、自分で自分守らなきゃ)

そう自分に言い聞かせながら、足を速めた。石畳が続く。街灯の明かりが、ところどころ暗い影を落としている。道端には、閉まった店のシャッターと、ゴミ袋が積まれた路地。二つ目の角を左に曲がろうとしたとき、不意に腕を掴まれた。

「ちょっと待って」

振り返ると、さっきの青年が立っていた。さっきまでと違い、少し息が上がっている。

「これ、落としたよ」

そう言って差し出されたのは、紙のメモ。さっき青年に見せた住所の紙だった。

「あっ……」

慌てて受け取る。確かに、手から滑り落ちていたらしい。

「ごめんね。ただ、君に変なことが起きてほしくなくて」

少し苦笑して、青年は続ける。

「ほら、あの通り、見える？」

斜め前の細い路地を指さす。街灯が一本だけ壊れていて、奥が暗く沈んでいる。

「酔っぱらいが多いんだ。あんまり質のよくない男もね。君のホステルは、その反対側。だから、あそこには絶対行かないで。いい？」

「わかりました。ありがとうございます」

「よかった」

彼は、ほんの一瞬だけ真顔になり、それからまた笑ってみせた。

「じゃあ、俺はこっち。気をつけてね、日本の子」

「ありがとう」

青年が別の方向へ去っていくのを見届けてから、優子は改めて深呼吸した。

(ちょっと、危なかったかも)

自分の注意力が落ちていることに気づき、少しだけ背筋が冷たくなる。

そのとき、ポケットの中でスマートフォンが震えた。画面を見ると、メッセージアプリの通知が表示されている。

『無事に着いた?』

送り主は、アキラだった。

(このタイミングで……)

思わず笑ってしまいそうになる。時差も考えずに送ってきているのか、それともわざとなのか。

『まだホテル向かってる。ちょっと迷った』

簡単に返すと、すぐに既読がついた。

『今日のへん? 店の看板とか教えて』

優子は、近くの店の看板を写真に撮って送る。数十秒後、返信が来た。

『その辺り、夜は酔っぱらい多いから、あんまり路地に入らないこと。今見てる地図だと、一本向こうの大通りに出た方が安全』

(地図、見てくれてるんだ)

じわっと、胸の奥が温かくなる。

『分かった。ありがとう、先生』

『先生やめる。ちゃんと着いたら、着いたって報告。寝るのはそれから』

優子は、「了解」とだけ返した。

スマホのバッテリー残量は、まだわずかに残っている。

(誰かに心配されてるって、こんなに心強かったっけ)

ホテルの赤い看板が、ようやく視界に入ったとき、足の力が抜けそうになった。受付でチェックインを済ませ、部屋に入る。二段ベッドが三つ並ぶドミトリ。他のベッドには、すでに何人かが寝息を立てていた。そっとベッドに潜り込み、毛布を肩まで引き上げる。スマホの画面に、「無事着いたよ」と打ち込んで送信した。すぐに返ってくる短いメッセージ。

『よし。おやすみ』

画面を暗くして、目を閉じる。

今日一日の出来事が、ざあっと逆再生されるように頭の中を流れていく。

祐介にフラれた公園。涼子の笑顔。BARのピアノ。見知らぬ青年の忠告。そして、遠く東京から届いた、「ちゃんと着いたか」という一言。

(守ってほしい、なんて思ってたわけじゃないのに)

気づけば、涙は出なかった。代わりに、深い疲労と、少しの安心感だけが身体を包んでいく。モントリオールの夜は、静かに更けていった。

## 12 ずるい優しさと淡い交差点

モントリオール二日目の朝は、驚くほど澄んだ青空だった。昨日の雨が嘘みたい、街路樹の葉が陽を受けてきらきらと光っている。

「起きてる？」

ホステルのロビーのソファに腰を下ろしていると、入口の自動ドアが開き、見慣れた顔が入ってきた。

「アキ君……」

薄手のコートにマフラー。トランクはなく、小さなショルダーバッグひとつだけ。日本の鑑定室で見ていた先生の姿と同じなのに、こうして海外で見ると、少しだけ違う人物に見える。

「時差ボケ、大丈夫？」

「うん。まあまあ。ていうか、なんでいるの？」

優子が目を丸くすると、アキラは肩をすくめた。

「ちょっと用事があったね。ついでに、迷子になりがちな優子ちゃんの見張り」

「ストーカー占い師だ」

「ひどいな。それでも遠いところから来てくれたクライアントを心配する、善良な先生ですよ」  
二人とも、少し笑った。

\*

カフェのテラス席で、二人は温かいカフェラテを手にしていた。目の前の通りには、自転車とベビーカーと犬を連れた人々が行き交っている。

「で、祐介くんには会えた？」

アキラが尋ねると、優子は一瞬だけカップのふちを見つめ、それから頷いた。

「うん。ちゃんとフラれてきた」

「そうか」

「一緒に住んでる人がいたの。涼子さんって言ってね、やっぱり綺麗でさ。ジャズピアノもすごくて、『ああ、この人ならしょうがないか』って、変に納得しちゃった」

その名前と「ジャズピアノ」という単語に、アキラの指先がピクリと止まった。

（涼子……？）

優子がずっと想い続けてきた「祐介」という男が、涼子の隣にいるあのギタリストだったのか。ここで初めて点と点が繋がり、アキラは一瞬だけ言葉を失った。

「……アキ君？」

「いや。……そうか、彼はちゃんと自分の道を見つけてるんだな」

アキラは平静を装って相槌を打つ。言葉とは裏腹に、優子の声の奥にはまだ少し痛みが残っていた。だからアキラはそれ以上、相手の男の素性を深く追及して彼女の傷をえぐるようなことはしなかった。

「でも、来て良かったとは思ってる」

優子は、空を見上げた。カップの縁に口をつける。温かさが、胸のあたりにじんわり広がる。

「ちゃんと好きって言えたから。もう、言わなかった後悔はしなくて済む」

「それは、いい旅になったね」

アキラは、素直にそう言った。

「ま、しばらくは痛むけど。心も、胃も」

「慰めが雑」

「現実主義者なんで」

二人の会話に、軽い風が混じる。カフェのスピーカーからは、控えめなジャズが流れていた。

「そういえば、昨日の夜」

優子が、ふと思いついたように言った。

「道に迷ってたときにメッセージくれたでしょ。あれ、偶然？」

「半分偶然。半分は……まあ、占い師の勘？」

「また適当なこと言ってる」

優子は笑ったが、その目には少しだけ潤んだ光が宿っていた。

「でも、嬉しかったよ。『ちゃんと着いた？』って、わざわざ聞いてくれる人がいるのって、思った以上に心強かった」

「当たり前でしょ。俺、優子ちゃんのなんだと思ってるの」

「え、なんだろう。都合のいい先生？」

「給料未払いの保護者、くらいには思ってるんだけど」

「そんな高待遇だったんだ」

会話のリズムが、いつもの日本と変わらないことに、優子は少し安心した。

\*

午前中の市内観光を終え、午後は旧市街の路地をぶらぶら歩いた。石畳の道。お土産屋のショーウインドウ。路上ミュージシャンのサククス。

「ねえアキ君」

「ん？」

「なんで、来てくれたの？」

唐突な問いだった。アキラは足を止め、少しだけ顔をしかめる。

「祐介は、涼子さんと一緒にいるって決めた。アキ君は、星崎詩音の件も、祈織の件もあって、誰かを守る資格ないって、ずっと言ってた」

優子のその言い方で、アキラは悟った。彼女もまた、かつてアキラが語った「モントリオールにいるピ  
アノ弾き」が、涼子であることに気づいているのだ。

「うん」

「なのに、私が迷子になりそうなときには、『ちゃんと着いた？』って連絡くれて、こうやって、さりげ  
なく隣歩いてくれる」

優子は、歩道脇のベンチに腰を下ろした。アキラも隣に座る。

「それってさ。結構ずるい優しさだと思っただよね」

「手厳しいな」

「だって、『俺には何もしてあげられない』って言いながら、結局こうやって、私のこと助けちゃうんだ  
もん」

アキラは、苦笑した。

「かもしれないね」

「かもしれない、じゃない」

優子は、真正面からアキラを見た。その視線に、嘘はなかった。

「……ごめん」

「謝らないで」

優子は首を振る。

「謝られるのが、一番キツイ」

しばらく沈黙が流れた。遠くで、誰かが犬を呼ぶ声がある。

「じゃあ、どうしたらいい？」

アキラの問いは、珍しく真っ直ぐだった。

「どうもしなくていいよ」

優子は、ふっと笑った。

「ただ、ずるい優しさだって、自覚しててくれれば」

アキラも、小さく笑い返す。

「了解。自覚しておきます」

「それにね」

優子は、少しうつむいて続けた。

「そういうずるさに、私、ちょっと救われてるところもあるから」

風が、二人の間を通り抜けた。髪が少しだけ揺れる。

「……優子ちゃん」

アキラが名前を呼ぶ声が、いつもより少し近く感じた。

「なに」

「もし今、俺が『日本に戻ったら、また一緒にジャズ聴きに行こう』って言ったら、それもずるい優しさ  
になる？」

「なるね」

優子は即答した。

「でも、きつと行くと思う」

彼女は、そう付け加えた。

二人は顔を見合わせて、同時に笑った。

\*

その日の夕方、ノートルダム大聖堂の近くの広場で、無料のストリートライブが開かれていた。小さなステージで、ギターとサククスとドラムのトリオが演奏している。観光客と地元の人々が入り混じって、自由に揺れている。紙コップのコーヒーやビールを手に、子どもも大人も、同じリズムを共有していた。

「やっぱり、生の音はいいね」

優子が言うと、アキラは頷いた。

「こういうの、一人で聴くより誰かと聴いた方がいいんだよ」

「その誰かに選んでくれて、ありがと」

「こちらこそ」

曲がアップテンポから、少しスロウなナンバーに変わる。夕暮れの空が、青からオレンジに滲み始めていた、らふと、前の方でひと組のカップルが、自然と身体を寄せているのが見えた。肩と肩。額と額。それを見た優子の胸に、軽い羨ましさが生まれる。

(こいいな)

心の中でだけ、ぽつりと呟く。

そのとき、不意に、肩に何かが触れた。アキラの手だった。

「寒くない？」

「……少しだけ」

本当は、寒さよりも、胸の中の空洞の方が気になっていた。けれど、今はそれを言う必要はない。

「ちょっとだけ」

アキラの腕が、優子の肩をそっと抱いた。強くない。簡単に振りほどけるくらいのも、軽い抱擁。優子は、驚きよりも先に、身体力が抜けるのを感じた。

「こういうのも、ずるいかな」

「うん。かなりずるい」

「ごめん」

「だから謝らないでって」

笑いながら言っていて、優子はアキラの肩に頭を預けた。音楽が続く。サクスのソロが、に向かって伸びていく。

「優子ちゃん」

「ん」

アキラの声が、耳元に近づいた。

「ちょっとだけ、試してみてもいい？」

「なにを」

「……俺の呪縛が、どれくらい弱くなってるか」

言葉が終わるより早く、唇が触れた。軽く。本当に触れるだけ。フレンチキスと呼ぶにはあまりに控えめな、でも、確かにキスと呼べる距離。優子は目を閉じた。

驚きはあったが、嫌悪感は不思議とない。むしろ、遠くから鳴るドラムのリムショットの音の方が気になった。

唇が離れる。

二人とも、すぐには目を開けなかった。

「……どう？」

先に口を開いたのは、アキラだった。

「まだ、ちょっと重そう？」

「そうだね」

優子は、ゆっくりと目を開けた。

「でも、思ったよりは、優しい味だった」

「それ、褒めてる？」

「褒めてる」

二人は顔を見合わせて、また笑った。夕暮れのモントリオールの下で、それは始まりとも終わりとも言えない、ただ一瞬だけ、二人が同じ方向を向いた、淡い交差点だった。

### 13 はじめましての挨拶とカフェでの決着

旧市街のカフェのテラスには、午後のやわらかな陽が差し込んでいた。石畳を歩き交う観光客の靴音と、コーヒーカップの触れ合う小さな音が、穏やかに混ざり合っている。アキラは、冷めかけたエスプレッソに口をつけるでもなく、ただ通りを眺めていた。モントリオールに来てから何度目かの午後だったが、心だけはまだ少しも落ち着いていない。

「アキラ」

名前を呼ぶ声に顔を上げる。

そこに立っていたのは、涼子だった。黒髪は以前より少し短く、表情には見覚えのある強さと、見たことのない静けさが同居している。その隣には、背の高い男がいた。ギターケースを肩に掛け、どこか緊張し

たような、それでいて人のいい笑みを浮かべている。涼子が、ほんのわずかに呼吸を整えてから言った。

「紹介するね。こっち、大谷祐介。今、私と一緒に弾いてるギタリスト」

男は一步前に出て、軽く頭を下げた。

「はじめまして。大谷祐介です」

差し出された手を、アキラは一拍遅れて握り返す。

「……橋本アキラです。はじめまして」

その手は、思っていたよりずっと温かかった。もっと棘のある相手を、勝手に想像していたのかもしれない。だが目の前の男には、必要以上に人を値踏みする気配がない。

「涼子から、何度か名前は聞いてました」

祐介は、少し照れたように笑った。

「昔から大事な人だって」

涼子が「ちょっと、余計なこと言わないで」と小声でたしなめる。

その声音に、アキラの胸の奥がかすかに軋んだ。

「座ってもいい？」

「ああ、もちろん」

三人はテーブルを囲んだ。ウェイターが追加のメニューを置いていくあいだ、ぎこちない沈黙が落ちる。先に口を開いたのは祐介だった。

「先生……じゃなかった、橋本さんも、こっち来てたんですね」

「先生でいいよ。そう呼ばれ慣れてるから」

「じゃあ遠慮なく。先生、モントリオールどうですか」

「寒いし、遠いし、でも音はいい街だね」

「それ、わかります」

祐介は頷いた。

「言葉はまだ全然ですけど、音だけは嘘つかないっていうか」

その言い方が妙にまっすぐで、アキラは少しだけ救われた気がした。

涼子がこの男と一緒にいる理由が、少しだけわかる。

「祐介、最近ね、こっち来てからギター変わったんだよ」

涼子が何気なく言う。

「前より、ちゃんと人の音を聴くようになった」

「なんだよそれ。前は聴いてなかったみたいじゃん」

「聴いてはいたよ。でも、自分のことで必死だった」

「それは今もだろ」

二人のやり取りに、生活の呼吸があった。アキラは、それを見ていた。羨望とも安堵ともつかない感情が、胸の奥で静かに混ざり合う。

やがて祐介が、ふっと立ち上がった。

「俺、ちょっと楽器屋寄ってきてもいいですか」

涼子が顔を上げる。

「え、今？」

「うん。ちょうどこの近くに、気になってた店あるし」

それから祐介は、アキラと涼子の顔を交互に見て、少しだけ笑った。

「二人とも、ちゃんと話したいことあるでしょ」

「祐介……」

「大丈夫。俺、空気読むの遅い方だけど、今日はさすがにわかる」

ギターケースのベルトを掛け直し、アキラの方へ軽く頭を下げる。

「先生、はじめましてでいきなりすみません。でも、涼子のこと、よろしく……って言い方も変か。とにかく、終わったら連絡ください」

「わかった」

「じゃ、またあとで」

祐介が去る。

扉のベルが小さく鳴り、姿が人混みに紛れて見えなくなると、テーブルには急に昔の時間だけが取り残されたような静けさが落ちた。

「……優しい人だね」

アキラが言うのと、涼子は小さく笑った。

「うん。優しい。びっくりするくらい」

「大事にされてるのが、見ててわかるよ」

「そうだね」

その返事は短かった。

けれど、そのあとに続く沈黙が、簡単な肯定では終わらないことを告げていた。涼子は、カップのふちに指を添えたまま言った。

「でもね、アキラ。私、今日これを見せたかっただけじゃない」

「何を」

「今の私の隣に、こういう人がいるってこと。ちゃんと自分の足でここまで来て、ちゃんと誰かと音を作ってるってこと」

アキラは黙って聞いていた。

「その上で、それでも聞いたかった」

涼子が顔を上げる。目はまっすぐだった。逃げてもいなければ、責めてもない。ただ、もう自分で選ぶと決めた人の目だった。

「私、まだあなたのことが好きだよ」

石畳を歩く靴音も、遠くの話し声も、急に遠のいた気がした。

「詩音さんのことを背負ってるあなたも、祈織さんを引きずってるあなたも、占い師として誰かを救おうとしてるくせに、自分のことになるとすぐ逃げるあなたも」

涼子は、かすかに笑った。

「全部ひっくるめて、好きだと思ってしまう」

アキラは目を閉じた。胸の奥で、長いあいだ凍っていた何かが、痛みを立てながら少しずつほけていく。

「……ありがとう」

ようやく出た声は、ひどく掠れていた。

「涼子にそんなふうに言ってもらえるの、たぶん俺の人生でいちばん贅沢だ」

「だったら——」

「でも」

アキラは、静かに言葉を継いだ。

「今の俺は、まだ隣に立ってない」

涼子は、すぐには何も言わなかった。

「どうして」

「まだ、過去を終わらせてないから」

アキラは、水の入ったグラスを指先でわずかに回した。水面が揺れ、午後の光を細かく散らす。

「詩音のことも、祈織と双子のことも、頭では整理したつもりでいる。でも、それを誰かの未来を受け取る覚悟に変えるところまで、まだ行けてない」

「……そっか」

「今の俺が涼子の隣に立ったら、きっとまたお互いに、目の前の相手じゃなくて、相手の中の過去を見る」  
涼子は視線を落とした。悔しさと理解が、同じ場所に沈んでいる横顔だった。

「ズルいね、アキラ」

「うん。知ってる」

「でも、そのズルさに何度も救われてきたから、嫌いになれない」

アキラは少しだけ笑って、右手を差し出した。

「今のところの決着、ってことで」

涼子はその手を見つめ、ゆっくり握り返した。

「またね、アキラ」

「また」

そのとき、カフェの扉が開いた。祐介が、紙袋を片手に戻ってくる。二人の表情を見て、何かを悟ったように、それでも何も聞かずに笑った。

「終わった？」

「うん」

涼子が答える。祐介は頷いて、それからアキラの前で一度だけ立ち止まった。

「先生」

「ん？」

「今日は、ちゃんとはじめましてができてよかったです」

まっすぐな目だった。

「次に会うときは、もう少しマシなギター弾けるようになっておきます」

アキラは、その言葉に少しだけ目を細めた。

「楽しみにしてるよ、祐介くん」

祐介は照れたように笑い、「じゃあ、行こうか」と涼子に声をかける。涼子は一度だけアキラを見て、小さく頷いた。二人の背中が石畳の向こうへ遠ざかっていく。ギターケースと黒髪が、夕方の光の中で並んで揺れる。アキラはその後ろ姿を見送りながら、ようやく思った。

——はじめて会ったのに、あの男のことを少しも嫌いになれなかった。それが救いなのか、罰なのかは、まだ分からなかった。

## 14 「さよなら」の代わりの言葉

モントリオール・トルドー空港の出発ロビーは、人の行き来とアナウンスの声でざわついていた。大きな窓の向こうには、灰色の滑走路と、雨上がりの空が広がっている。

「ここまででいいよ」

チェックインカウンターを終えたアキラが言うと、涼子は首を横に振った。

「ゲートの前まで行く」

「子どもの見送りじゃないんだから」

「子どもみたいなこと、散々してきたでしょ、お互い」

軽口の奥に、いくつもの夜が挟まっている。星崎詩音の事件の夜。涼子が日本を発った朝。そして、ついさっきのカフェでの告白と決別。

少し離れたベンチには、優子が座っていた。二人の邪魔をしない距離を保ちながら、キャリアケースに肘を預けて空港の電光掲示板を眺めている。

「日本、暑いかな」

涼子がぼつりと言う。

「きっと蒸し暑い。エアコンの室外機の熱風と、コンビニの匂いと、セミの声でこった返してる」

「それ、全然いいイメージじゃない」

「でも、帰りたくなる時って、だいたいそんな匂い出すもんだよ」

ボーディングゲート前の電光掲示板に、「BOARDING 30 min」の文字が点った。

「ほんとは」

涼子が足元を見つめたまま続ける。

「一緒に日本帰ろうよって言いたい自分も、どこかにいる」

「知ってる」

アキラは、あっさりと認めた。

「だから、ここでちゃんと行ってくるって言ってくれる涼子の方を、信じたい」

涼子は顔を上げる。アキラの表情は、穏やかで、どこか寂しい。

「自分の足でここまで来たんだからさ。自分の足で、ここに残るかどうか決めなよ。俺は、俺で一回、日本で過去と決着つけてくる」

「決着つく？」

「つけるように努力する」

「努力かぁ」

涼子は小さく笑った。

「じゃあ、私も努力しよう。過去を言い訳にしないで弾けるピアノに」

「できるよ」

アキラはそう言い切った。

「自分が一番信じられない時は、誰かの占いに頼ればいい。ああ見えて、こっちには優秀なギタリスト兼ルームメイトもいるし」

「そうだね。彼、最近やっとチューニングが安定してきた」

二人で少しだけ笑い合う。アナウンスが流れ、「東京行き」の搭乗開始が告げられた。人々が列を作り始める。

「アキラ」

涼子が一歩近づいた。空港の騒音の中、それでもはっきり聞こえる声。

「さよなら、じゃなくて、いってらっしゃいって言っていていい？」

アキラは、少しだけ考えてから頷いた。

「じゃあ、俺も、さよならじゃなく、いってきますって返すよ」

「……いってらっしゃい」

「いってきます」

言葉を交わし、二人は短く抱き合った。強くない。互いの存在を確認するだけの、軽い抱擁。すぐに離れる。未練を引きずらない距離。アキラがゲートの列に並ぶと、少し離れたベンチから優子が立ち上がった。

「アキ君」

手を振ると、アキラも手を上げる。

「日本戻ったら、ちゃんとご飯行こうね。モントリオール土産話、いっぱい持ってくるから」

「楽しみにしてる」

それだけ言って、アキラは列の中に消えていった。ガラス越しに見える搭乗ブリッジを渡る姿を、涼子と優子はしばらく無言で見つめていた。

「……行っちゃったね」

優子が言う。

「うん」

涼子は短く答えた。

「寂しい？」

「寂しいよ」

即答だった。

「でも、残るって決めたのも、自分だから」

その横顔には、数年前の彼女にはなかった強さが宿っていた。

「優子ちゃんは？」

「私も、帰る。ちゃんと日本で働いて、たまにジャズ聴いて、モントリオールまで行ってフラれた女ってネタで笑えるようになるまで」

「かっこいいじゃん、それ」

「でしょ？」

二人は顔を見合せて笑った。

「祐介、迎えに来てくれるかな」

優子がふと呟く。

「たぶん、練習の合間に走ってくるよ。ああ見えて、そういうところ律儀だから」

涼子は、自分のスマホを取り出し、短いメッセージを送った。

『今、空港。アキラ、出発した。』

優子ちゃんのフライト時間、教えてあげて』

すぐに既読がつき、「すぐ行く」と一言だけ返ってきた。涼子はその画面を見て、小さく笑う。(ホント、そういう所だけは真面目なんだから)

## 15 ダサくて臆病な男の不器用な約束

空港のロビーに、少し息を切らした祐介が飛び込んできた。

「悪い、遅くなった！」

ギターケースは背負ったまま。多分、スタジオから全力で来たのだろう。

「ギリギリセーフ」

優子は笑った。

「そんな大事なライブでもないのに、無理させちゃったね」

「大事だよ」

祐介は、即座に返した。

「日本からわざわざ来て、ちゃんと好きだって言って、ちゃんとフラれた女を見送りに来るんだから。俺の人生の中でも、結構レアなイベントだ」

「言い方」

優子は苦笑しながらも、その言葉に少し救われていた。

「涼子さんは？」

「先に戻らせた。ピアノの先生とレッスンだってさ。祐介はちゃんと見送りしてきなさいって」

「……いい女だね」

「うん。いい女だよ。いろんな意味で、手に余るくらい」

祐介は、搭乗案内ボードを見げる。

優子の乗る便の横に「ON TIME」の文字。

「日本に戻ったらさ」

ふと、口を開いた。

「ちゃんと飯食えよ。仕事で、変な無理すんなよ。しんどくなったら、アキラ先生のところ行って、疲れてますって言っとけ」

「説教三連発？」

「遠距離でフラれた元カレとしての、最低限の使命」

「元カレ名乗る資格ないでしょ」

「元・片思われでもいいけど」

二人は、肩をすくめて笑い合う。搭乗開始のアナウンスが流れる。優子はキャリアケースのハンドルを握り直し、祐介の方を向いた。

「祐介」

「ん」

「好きだったよ。今でも、あなたのギターのこと考えると、ちょっとだけ苦しくなる」

まっすぐな言葉だった。祐介は、視線を逸らさずに受け止める。

「……ありがとな」

今度は、はっきりと言葉にした。

「こんなダサい俺を、そこまで好きになってくれて。モニターオールまで来てくれて。ちゃんとフラレにきてくれて」

「フラレにきて、って言うな」

優子は涙声で笑った。

「でも、来て良かった。ちゃんと好きだったって、自分で言えるから」

「次は？」

「次？」

「次、誰か好きになる時さ。もうちょっと条件ゆるくしてもいいんじゃないかなと思って」  
「条件？」

「ダサくて、臆病で、夢から逃げグセがあるのに、最後まで手放せない男は、結構めんどくさいタイプだぞって」

「知ってるよ」

優子は、笑いながら涙を拭った。

「だから好きになったんだし。でも、次は……そうだな。ちゃんと自分を大事にしてくれる人がいいかな」

「それがいい」

祐介は頷いた。

「もしそのとき、その男がギター弾いてたら——ちょっとだけ嫉妬するかもしれないけど」

「しなくていいよ」

優子は、搭乗ゲートの方を指さした。

「だって、最初に私のためにギター弾いてくれたの、祐介だから。その記念は、一生消えないから」

祐介の胸に、じわっと何かが広がる。

(純愛って、こういうやつのことを言うのかもしれない)

勝手に「守る」対象にして、勝手に「気を遣う」んじゃないで、自分の痛みも相手の痛みも、自分で選んで引き受ける覚悟。それを、遠くから、時間をかけて見せつけられた気がした。

「じゃ、行くね」

優子が手を伸ばす。祐介も手を出し、固く握り合った。

「また日本で。今度は客席から、うるさいくらい拍手してやる」

「その頃には、ちゃんと拍手に値するギター弾けるようにしとく」

手を離し、優子はゲートの方へ歩き出した。振り返らない。振り返ったら、泣きながら駆け寄ってしまいうそで。ゲートの向こうに姿が消えたあとも、祐介はしばらくその場所に立ち尽くしていた。

(ありがとうな)

今度は、心の中だけじゃなく、ちゃんと声に出してみる。

「ありがとうな、優子」

言葉は、人混みと空調の音にかき消された。それでも、自分の耳にははっきり届いていた。モントリオールの空には、少しずつ雲が広がり始めていた。どこかで、飛び立つ飛行機の音がする。祐介はギターケースのベルトを握り直し、ゆっくりと空港を後にした。彼の背中には、これまでよりほんの少しだけ重く、そしてほんの少しだけ、温度の違う覚悟が乗っていた。

## 16 メッセージ イン モントリオール

成田に降り立った翌日、アキラはほとんど一日中、時差ボケと片付けに追われていた。スーツケースを開けっぱなしにしたまま、洗濯機を回し、鑑定室に持ち込む荷物を仕分ける。

夜、シャワーを浴びてベッドに倒れ込んだあと、なんとなくスマートフォンを手を取った。指が、無意識に開いたアプリがある。涼子のインスタグラム。最新の投稿には、モントリオールのスタジオらしき風景が写っていた。白い壁。マイクスタンド。グランドピアノ。キャプションには、英語と日本語が混ざっている。

Tomorrow 15:00 (Montreal time),

「めぐり逢え」。 on YouTube live.

久しぶりの生配信、よかったら覗きに来てください。

(めぐり逢い、か)

アキラはそのタイトルを見ただけで、胸の奥がざわついた。詩音も一度だけ弾いたことのある曲。涼子が何度もアレンジを変えて、ようやく自分の形にした曲。画面をスクロールすると、配信予約のリンクが貼られている。日本時間では、明け方の四時。

「4:00 AMか」

思わず口に出したとき、頭の中に別の曲名が浮かんだ。ルナシーの「4:00 AM」。若い頃、どうしようもない夜に何度も弾いた曲だ。

(寝てる場合じゃないな)

アキラは、配信のリマインダーをオンにした。

\*

午前3時50分。

東京の空はまだ真っ暗で、窓の外には、遠くの高速道路のライトだけがぼんやりと光っている。鑑定室の椅子に座ったアキラは、膝の上にアコースティックギターを乗せていた。久しぶりに取り出したギターは、少しだけ弦が錆びていた。

それでも、チューニングを合わせると、まだきちんと音を返してくれる。スマホの画面には、「藤原涼子生配信予定」の文字。開始まで、あと数分。アキラは指先で弦を軽く弾く。低い音が部屋にしみ込んでいく。午前4時ちょうど。画面が切り替わり、配信が始まった。モントリオールのスタジオ。白い壁に、窓からの淡い光。ピアノの前に座る涼子の姿。

「おはようございます。こんにちは、こんばんは」

少しきこえない日本語で、彼女はいつもの挨拶をする。

コメント欄には、世界中から「Hi Pyo」「久しぶり」「モントリオールから応援してます」の文字が流れていく。

「今日は、めぐり逢いを弾こうと思います。いろんな出会いと別れがあって、それでも音楽を続けてきて良かったなって、最近やっと思えるようになりました。私はこれからも心と心で繋がれるようなご縁を大切にしていきたい。そのような想いを込めて弾きます。アンドレ・ギャニオンさんの名曲です。めぐり逢い」

涼子は、子供を寝かしつけるかのように甘く囁く言った。アキラは、息を詰めるようにして画面を見つめていた。涼子の指が、鍵盤に落ちる。柔らかなイントロ。静かで、どこか懐かしい和音の連なり。詩音の影も、自分の影も、祐介のギターの影も、全部うっすらと混ざっているような音。

（変わったな）

何度も聴いてきたはずの「めぐり逢い」が、少しだけ違って聞こえた。以前より、少しだけ肩の力が抜けている。完璧さを追い詰めるような緊張感が和らぎ、その代わりに「今ここで、生きて弾いている」呼吸が宿っている。画面の中で、涼子は目を閉じていた。ピアノの上に置かれた、譜面のない譜面台。彼女はもう、この曲を身体の内側から弾いている。胸の奥が、じわりと熱くなる。

（俺がいなくても、ちゃんと前に進んでる）

当たり前のことだ。それでも、実際に目の前で見せつけられると、嬉しさと寂しさが同時に押し寄せてくる。曲がクライマックスに向かう。高音域のフレーズが、モントリオールの空へ伸びていく。その瞬間、不意に視界が滲んだ。

「……ああ」

自分でも驚くほど、あっさりと涙がこぼれた。星崎詩音の事件のあとも、祈織が姿を消したあとも、涼子が日本を発ったときも、アキラは泣かなかった。泣けなかった、という方が近い。

（俺が泣く資格なんてない）

そう思い込んでいた。泣くこと自体が甘えであり、誰かのせいにする行為のように感じていた。けれど今、モントリオールと東京を繋ぐちっぽけな画面の前で、彼はどうしようもなく涙を流していた。

「……ほんと、今さらだな」

苦笑まじりに呟き、手の甲で乱暴に目元を拭う。拭っても拭っても、涙は止まらない。ピアノの音が、最後の和音を残して静かに消えた。

涼子がゆっくりと目を開け、深く一礼する。コメント欄には、「ブラボー」「泣いた」「beautiful」の文字が次々と流れていく。アキラは、スマホをそっと机に置いた。膝の上のギターが、じんと重く感じられる。窓の外はまだ暗いが、遠くの空がわずかに白み始めている。

アキラは、ギターのネックを握り直した。ゆっくりと、あの曲のコードを鳴らす。

ルナシーの「4:00 AM」。

かつて、真夜中に一人で弾き語りながら、世界のどこにも自分の居場所がないように感じていた曲。今度は、少しだけ違う気持ちで弾ける気がした。

「どうせなら、ちゃんと届けてみるか」  
誰に言うでもなく呟き、アキラは指を動かした。静かなアルペジオ。かすれ気味の声。歌詞の一つ一つが、これまで積もった夜の記憶を掘り起こしていく。気づけば、また涙が零れていた。今度は、それを止めようとは思わなかった。最後のコードを鳴らし終わると、部屋の中には、ギターの残響と、自分の荒い息遣いだけが残った。スマホの画面を手取る。インスタのDM画面を開く。  
宛先は、「R.Fujiwara」。

新しいメッセージウインドウに、指が震えながら文字を打ち込む。

【メッセージイン モントリオール】

全て書き終わると、アキラは珍しくウィスキーを飲みたくなった。

☒

同じ頃、モントリオール。配信を終えてスタジオの片付けをしていた涼子のスマホが、テーブルの上で小さく震えた。画面には、「橋本アキラ」の名前と、新着メッセージ通知。それを見た瞬間、涼子の胸の中で、何かが静かに切り替わった。メッセージを開き、最後まで読み終えたあと、涼子はしばらく目を閉じた。そして、ゆっくりと深呼吸をする。

(……そうか)

心の中で、誰にもなく呟く。すぐに返信はしない。代わりに、ピアノの前に座り直す。譜面台には、新しい白紙の五線紙。ペンを取り、日付を書く。その下に、曲名の候補を書きかけて、やめる。

(タイトルは、全部決めてからでも遅くない)

鍵盤に指を置く。決断は、もう胸の中で固まりつつあった。この瞬間から、彼女の弾く音は、ほんの少しだけ新しい方向を向き始めた、ということだった。

## 17 天地徳合 占いの行方は

モントリオールの騒がしい日々からしばらく経ち、日本の夏が始まりかけていた。涼子は一時帰国し、東京のジャズクラブを巡るミニツアーの真っ最中だった。サポートギタリストに選んだのは、もちろん祐介である。

「せっかく日本にいるんだからさ。昔の友だちも呼ぼうよ」

ある夜のリハーサル後、涼子は何気ないふりをして言った。

「優子ちゃん、最近どうしてる？」

「元気だよ。たまにアキラのそこ行ってる」

「じゃあ、ライブ誘ってよ。祐介のギターも聴かせたいし」

その言い方があまりに自然で、祐介は疑う隙を持たなかった。ライブ当日。小さなジャズバーの、客席後ろから二列目。優子は、ドリンクを両手で包むように持ちながら、ステージを見つめていた。

涼子のピアノが、軽やかに走る。その横で、祐介のギターが食らいつくように絡みついていく。

(やっぱり、かっこいいな)

モントリオールで泣きながら告白して、泣きながらフラれた相手。それでも、ステージ上の祐介を見ると、胸のどこかがきゅっと痛む。

ライブが終わり、涼子は楽屋から真っ先に優子のもとへ駆け寄った。

「久しぶり。来てくれてありがとう」

「こっちこそ。モントリオールでの動画より、やっぱり生がいいね」

少し後ろで、祐介がタオルで汗を拭きながら近づいてくる。

「よう、優子。わざわざご来場ありがとうございます」

「チケット代分は、ギリギリ元取れたかな」

「ギリギリかよ」

そんな軽口を交わしながら、三人で打ち上げへ向かう。居酒屋のテーブル席。涼子は、さりげなく席順を仕込んだ。祐介と優子を隣に座らせ、自分は向かい側に陣取る。

「ねえ優子ちゃん、祐介ってさ、昔からこういうところ空気読めないよね」

「うん。そこがかわいいところでもあるけど」

「おい、目の前でディスプレイするな」

笑いが弾ける。そんな光景を見ながら、涼子の胸の中には、少しだけ温かいものが広がっていた。

(この二人、同じ方向見て笑うの、よく似合うな)

☒

数日後。優子は久しぶりに、アキラの鑑定室を訪ねていた。

「どう、モントリオール土産話の続きは」

「続きっていうか……別の話かな」

そう言って、優子は最近のことを話し始めた。

- ・ 涼子の日本ツアーを観に行ったこと
- ・ 打ち上げて祐介と隣同士になったこと
- ・ それから何度か、三人やバンド仲間が集まって飲みに行ったこと

アキラは、聞きながら、机の上に命式表を広げていた。優子の生年月日。祐介の生年月日。以前も出したことのある情報を、改めて丁寧に並べ替える。日柱と日柱。天と地。その組み合わせを見た瞬間、アキラは眉を上げた。

(……天地徳合)

自分の中で、静かな驚きが広がる。

「ねえアキラ君、どうかした？」

優子が覗き込む。

「いや、ちょっと面白いなと思って」

アキラは、命式から目を離さずに言った。

「祐介といるとき、一番楽だったのって、いつ？」

「え？ 会社にいた頃は……深夜にくだらない話してた時かな。最近だと、ライブ後にラーメン食べに行って、音楽の話でくだらない喧嘩したとき」

「ケンカ？」

「そのフリーズ、パクリじゃない？ とか、いやオマージュだとか」

優子は笑った。

「でも、結局最後は笑って終わるんだよね」

アキラは、命式から目を上げた。

「それ、多分ね」

「うん」

「星の上では、かなりいい組み合わせってやつだよ」

アキラは少し控えめに言った。

「……へえ」

優子は、わざと興味なさそうな声を出した。

「やめてよ。運命の相性ですとか言われたら、また変に期待しちゃうじゃん」

「言わないよ」

アキラは肩をすくめる。

「ただ、覚えておいてもいいのは、楽だなって感覚は、星的にもだいたい正解だってこと」

「楽、ね」

優子は窓の外を見上げた。

(楽。確かに、祐介といると、モントリオールで泣きながら告白したときの痛みが、少しだけ薄まる)それが「恋」かどうかは、まだ自分でも分からない。分からないからこそ、軽々しく言いたくはなかった。

☒

秋の終わり頃。優子は再び鑑定室を訪れた。

「今日は、ちょっと報告があった」

「悪い報告？」

「うーん。占いの師的には、悪いのかもしれないけど、私的には、たぶん大事な報告」  
いつもの冗談めいた前置きに、少しだけ緊張が混ざっていた。

「祐介とは？」

「相変わらずだよ。ライブ行って、ご飯行って、くだらない話して。楽しいし、落ち着く」

「いいことじゃん」

「うん。でもね」

優子は、両手を膝の上で組んだ。

「たまに、彼の視線がどこか遠くを見るの。音楽の話をしてるとき、とくに」

モントリオール。旧市街の石畳。あの街で過ごした時間の影。優子は、それをもう責める気にはなれなかった。

「涼子さんのこと、完全に終わったわけじゃないんだと思う。音楽のパートナーとしての絆もあるし、届かなかった恋としての未練も、少しはあるんじゃないかな」

「……そうかもしれないね」

アキラは否定しなかった。

「だからさ」

優子は、まっすぐアキラを見た。

「天地徳合って言われたの、嬉しかったけど——」

「言っていないけどね」

「顔に書いてあるよ、先生」

二人で少し笑ったあと、優子は続けた。

「嬉しかったけど、星がどれだけ合ってますって言ってもさ、本人がまだ別の場所を見てるうちは、私、そこに割り込む気はない。だから今回ばかりは、占いは外れたってことにしようかなって」

アキラは、しばらく黙っていた。

「本当にそれでいい？」

「うん。私の恋は、モントリオールでちゃんと終わってる。あとは、私が終わったこととして受け止めて、自分の人生に戻るだけ」

その言葉には、痛みと強さが同居していた。

「祐介の隣に立つ人が、私じゃないなら、それでもいい。私、誰かの残り物みたいな立ち位置で、誰かを好きになりたくないから」

アキラは、ゆっくりと息を吐いた。

（このまま見送るのは、簡単だ。でも、本当にそれでいいのか）

自分の中で、何かが静かに反論してくる。

その夜、鑑定がすべて終わったあと、アキラは一人で命式と向き合った。優子。祐介。涼子。そして自分。星の流れを眺めながら、過去の場面が脳裏をよぎる。星崎詩音を止められなかった夜。祈織が姿を

消した朝。モントリオールで涼子に決別を告げたカフェ。

(あのときも、俺は動かない理由ばかり探してた)

今回は違う選択をするべきだ。そう思った。

「……一回だけだ。今度こそ、星のせいにも、過去のせいにもせずに動こう」

航空券予約サイトを開き「東京↓モントリオール」の便を探した。

☒

アキラはモントリオールに降りたった。冬の入口の冷たい空気。ノートルダム大聖堂のライトアップが、白い息を淡く照らしている。旧市街のカフェ。アキラは、涼子と祐介の向かいに座っていた。

「わざわざ、何しに来たんですか」

祐介が少し照れたように笑う。

「観光と……説教かな」

「説教？」

アキラは、カップのコーヒーをひと口飲んでから、真剣な目で祐介を見た。

「祐介。お前、いつまで二つの場所に片足ずつ突っ込んでるつもりだ」

「……どういう意味」

「優子といるときは、日本の今を見て、涼子といるときは、モントリオールと昔を見て。そんな器用なバランス、いつまでも続かないよ」

祐介は黙り込んだ。

涼子も、静かにアキラの言葉を聞いている。

「優子の気持ち、聞いたよ。占いは外れたって、自分で言って身を引こうとしてる」

「……」

「俺は占い師だから、星は見える。天地徳合だって分かる。でも、星がどれだけ合ってるって言っても、本人が選ばないなら意味がない」

アキラは、少しだけ声を強くした。

「だから、お前に聞きに来た。祐介、お前はどっちの人生を本気で生きたい？」

祐介は、拳を膝の上で握りしめる。

「涼子と音楽を続けるか。優子と、音楽も含めた生活を作るか。二つ選ぶのは、もうやめろ」

長い沈黙のあと、祐介は口を開いた。

「……俺は」

そこで言葉を詰まらせる。涼子が、そっと口を挟んだ。

「もういいよ、祐介」

二人の視線が、涼子に向かう。

「私ね、多分一生、アキラのことも、詩音さんのことも忘れない。でも、それを引きずったまま、誰かの隣に立ちたいとは思わない」

涼子は、まっすぐ祐介を見つめた。

「あなたには、もう一人、ちゃんと今のあなたを見てくれる人がいる。モニターオールまで来て、フラれて、それでも今も笑って隣で音楽聴いてくれる女の人が」

優子の姿が、三人の脳裏に浮かぶ。

「だから祐介。音楽の相棒は、ここに置いていきなよ。生活の相棒は、日本に迎えに行つて」

祐介は、目を見開いたまま、何も言えなかった。アキラは、静かに頷く。

「答えは、出てるようなもんだな」

☒

冬の澄んだ空気が、駅前のロータリーを冷やしていた。街路樹には安っぽいイルミネーションが巻きつけられている。優子は、仕事帰りにアキラの鑑定室へ向かう途中だった。ビルの前の自動ドアをくぐろうとしたとき、見慣れたギターケースが視界に入る。

「……なんでいるの」

足が止まる。

「ただいま、かな」

祐介が、寒そうに笑った。

「ツアー？」

「違う」

彼は、ギターケースのベルトを握り直した。

「ちゃんと好きになりに来た。モニターオールまで来て、フラれて、それでも来て良かったって言うてくれた女のところに」

優子は、息を呑んだ。

「今さら、なに言ってるの」

「今さらじゃなきゃ、言えなかったんだよ」

祐介は、一歩近づく。

「俺、多分ずっと涼子のことを届かなかった恋ってラベル貼って、美化してた。逃げ場にした。でも、ここまで来てやっと気づいた」

胸の奥から絞り出すように続ける。

「俺が一番救われたのは、モニターオールまで来て、ちゃんとフラれて、それでも来て良かったって笑ってくれた優子の存在だったって」

優子の視界が、じんわりと滲む。

「……占い、外れたんじゃないかなかったんだ」

小さな声で呟いた。

「途中で、自分から降りただけだったんだ、私が」

祐介は、驚いた顔をする。

「優子」

「なに」

「もう一回……言ってくれる？」

「何を」

「好きだったでも、好きですでも」

優子は、涙を拭い、ふっと笑った。

「しつこいなあ。しょうがないなあ」

一歩、彼の懐に入り込み、まっすぐに目を見る。

「祐介。私、あなたのダサくて臆病で、夢から逃げグセがあるところも含めて、ずっと好きだった。今も、多分、これからも」

祐介は、大きく息を吐いた。

「俺も、やっと今ここにいる優子をちゃんと見れそうだ」

ゆっくりと手を伸ばし、優子の手を握る。ビルの上の階、鑑定室の窓からその光景を見ていたアキラは、そっとカーテンを閉めた。

（占いは、外れてなんかいなかった）

ただ、星が示す「天地徳合」に、現実が追いつくまで、少し時間がかかったただけだ。

## 18 祝福のワルツ

昼下りの光は、窓ガラスをやわらかくぐり抜けて、古い倉庫を改装したその小さな会場を、薄い金色に満たしていた。天井の高い空間には、白い布と、譜面を折ったような紙飾りが吊るされている。壁際には古びたアンブと、何度もステージをくぐり抜けたドラムセット。まるでライブハウスと結婚式場の境目を、誰かがそっと塗り替えたような、奇妙であたたかい場所だった。祭壇の代わりに置かれているのは、白いクロスをかけられたアップライトピアノと、一本のスタンドマイク。その前で、新郎新婦が並んで立っている。祐介は、いつもより少しだけきちんとしたスーツを着ているが、足元のスニーカーは履き慣れたままだ。ネクタイの結び目がわずかに曲がっているのを、さっきまでスタッフが直そうとして諦めていた。優子は、真新しいドレスではなく、柔らかな生成りのワンピースに、小さな白いコサージュだけを添えている。派手さはないが、その控えめさが、二人らしかった。

「緊張してる？」

小声で優子が尋ねる。

「してない。……って言おうと思ったけど、嘘だな。指、震えてる」

祐介は、手に持ったピックをそっと握りしめる。それは、今日のために新しく買ったものではなく、モントリオールから帰ってきて最初に録音したときに使っていた、少し角の丸くなったピックだった。前列には、バンド仲間たちが肩を並べて座っている。涼子は、淡いブルーグレーのドレスに身を包み、ピアノの前の椅子に腰掛けている。

その斜め後ろ、壁にもたれるようにして立っているのがアキラだ。黒いシャツにジャケットという、いつもの「仕事着」のような格好なのに、今日だけはどこか別人に見える。

司会者が簡単な紹介を終え、軽く咳払いをする。

「それでは、新郎新婦による最初のセッションです」

笑いと拍手が湧く。神父も牧師もいない。ここでは、誓いの言葉より先に、音が鳴る。涼子が、鍵盤の前で指を組み、そっと目を閉じる。深く、ゆっくりとした呼吸。次の瞬間、柔らかな三拍子が会場に流れ出す。遠い街の石畳の上を歩くような、揺れるリズム。そこに祐介のギターが、静かに入り込む。一音目は、ほんのわずかに震えていた。だが、二音目、三音目と重ねるうちに、その震えは次第に、別のものへ形を変えていく。緊張ではなく、確かな実感。ここにいる、という感覚。優子は隣で、マイクを握りしめていた。今日歌う曲は、二人で書いた、小さなラブソングだ。タイトルはまだ決めていない。完成稿をプリントした紙には、ただ「Untitled」とだけ書かれている。イントロが終わり、鍵盤が音を薄くしている。その上を、優子の声が、慎重に、一段ずつ階段を上るように立ち上がる。

遠くまで行くつもりだったのに

同じ駅で降りたあなたと

帰り道のコンビニの灯りまで

なぜかちょっと 愛おしかった

完璧な歌唱ではない。

ところどころ、涙がせりあがり、声がかすれる。それでも、その不器用さごと、会場の空気が抱きとめている。涼子は鍵盤越しに、そっと二人を見上げる。アキラは、目を細めてその歌を聞いている。音楽は、いつだって残酷で、いつだって優しい。

誰かを傷つけ、誰かを救い、その両方を抱えたまま、今日も鳴っている。曲が終わると、しばしの静寂が訪れた。拍手を忘れてしまうほどの、短い沈黙。そのあと、一斉に手が鳴り始める。まるで、曲の余韻に合わせて降る、柔らかな雨のようだった。司会者が再びマイクを握り、「指輪の交換を」と言う。

用意されたリングは、決して高価なものではない。シンプルなシルバーの輪。けれど、その内側には、小さな刻印がある。

“Message t o n o w”

誰かから届いたメッセージに救われた二人が、今度は「いま、この瞬間」を互いに贈り合う。そう決めた証だった。祐介の指先は、やはり少し震えている。優子の薬指にリングを通そうとして、ほんのわずか

に引っかかる。

「ちょっと、緊張しすぎ」

「お互いさま」

笑いが起き、空気が少しだけゆるむ。リングが、指の節を越える。

金属の冷たさが、じきに皮膚の温度に馴染んでいく。今度は、優子の番だ。祐介の手は、ギタリストらしく、細く、ところどころ硬くなっている。その指にリングを通しながら、優子は心の中で、小さく咳く。

(モントリオールで終わったはずの恋が、こんなふうには、東京で続いていくなんてね)

それは奇跡ではない。

星が書き換えた運命でもない。誰かが何度も迷って、泣いて、選び直した結果として、いまここにあるだけだ。指輪の交換が終わわり、司会者が笑顔で言う。

「それでは、皆さま。新郎新婦に、大きな拍手を」

拍手の中で、祐介と優子は、そっと抱き合う。キスは、ごく短く。照れと幸福のちょうど真ん中あたりで、すぐに離れる。二人の顔は、少年と少女のように赤くなっていた。

\*

パーティがひと段落した頃。会場の外のテラスには、薄暗い夕暮れが降りていた。冬の手前の冷たい風が、紙コップの中で揺れるシャンパンの泡をわずかに震わせる。テラスには、ほとんど人影がなかった。室内からは、笑い声とグラスの触れ合う音が、くぐもって聞こえてくる。その片隅に、涼子が立っていた。ショールの裾を押さえながら、夜空を見上げる。東京の空は、星が少ない。それでも、目を凝らせば、いくつかの光が、ビルの隙間から顔を覗かせている。

「寒くない？」

背後から聞き慣れた声がある。

「ちょっとだけ」

振り返ると、アキラが立っていた。

ジャケットのポケットに両手を突っ込み、肩をすくめている。

「相変わらず、こういうときにちょうどいいタイミングで出てくるよね」

「職業病かな」

涼子は笑い、テラスの手すりにもたれかかった。アキラも隣に立つ。二人の間に、わずかな距離。それはかつて「埋められなかった距離」だったものが、今は「守るべき距離」としてそこにある。

「いい式だったね」

「うん。二人とも似合ってた」

「似合ってたね」

しばらく、言葉が途切れる。室内から、誰かが下手くそな乾杯の音頭をとる声が聞こえてきて、二人は同時に吹き出した。

「ねえ」

と、涼子が切り出す。

「私たちさ」

「うん」

「もし、もう少しだけ、あのとき勇気出せてたら、違う形でここに立ってたのかな」

「さあね」

アキラは、夜空を見上げたまま答えた。

「たぶん、どこかは違ってたんだろうけど、結局、今日みたいに笑ってる未来を選びたかったのは、同じかもしれない」

涼子は、その言葉をしばらく味わうように黙っていた。やがて、ふっと息を吐いて、彼の方へ身体を向ける。

「じゃあさ。今日くらいは、違う未来に、ちょっとだけ挨拶してもいい？」

「違う未来？」

「うん。もしもの方の、私たちに」

涼子は、一歩近づいた。彼の胸元に手を置き、見上げる。アキラは、一瞬だけ目を伏せ、そして静かに頷く。

「一回だけだよ」

「一回でいい」

涼子は背伸びをして、アキラの唇にそっと触れた。それは熱に濡れるキスではなかった。長い未練と、言えなかった言葉と、選び損ねた分岐点に対する、小さな弔いのようなキスだった。たった数秒。それでも、時間が少しだけ伸びたように感じられた。離れたあと、二人は自然に笑った。どちらの目にも、涙はなかった。

「これで、おしまい」

涼子が言う。

「うん。やっとおしまいにできたね」

「これからは？」

「これからは、それぞれの物語の続き」

涼子は、会場の方を振り返る。窓越しに見える祐介と優子は、誰かにシャンパンを注がれて、困ったように笑っている。音楽仲間たちが、その周りで騒いでいる。

「私、カナダに帰ったら、新しいアルバム作る。ワルツ・ア・モントリオールも入れてさ。今日の話は、たぶんブックレットのどこかに、ちょっとだけ匂わせる程度にしておく」

「読んだ人、分らないだろうね」

「それでいいの。私と、あの街と、今日集まった人たちだけが知ってればいい秘密」

アキラは、テラスの手すりから背を離す。

「じゃあ俺は、日本で相変わらず星を見てるよ。誰かが迷ってたら、大丈夫だよ、外れてもって笑って言えるくらいには、ちゃんと年を取りたい」

「似合うね、それ」

涼子はそう言うてから、右手を差し出した。

「じゃあ、改めて。ここから先は、友だちとしてよろしく」

アキラも、その手をしっかりと握り返す。

「こちらこそ。たまに、モントリオールの空の写真、送ってよ」

「たまにどころじゃないよ。うるさいくらい送る」

二人は、握った手を離す。それは別れの合図であると同時に、続きの始まりの印でもあった。テラスの扉が開き、誰かが顔を出す。

「アキラさん！ 涼子さん！ 新郎が弾き語り始めましたー！ ちょっと来てください、やばいです、キーが！」

中から溢れた笑い声に、二人は顔を見合わせる。

「行こっか」

「うん。主役、放っとくわけにはいかないしね」

アキラと涼子は並んで歩き出す。さっき交わしたキスの余韻は、もうどこか遠くの出来事のように薄れていた。代わりに、胸の奥で静かに灯っているのは、それぞれのこれからに向けた、小さな期待の光だった。扉をくぐると、音と笑いと、紙吹雪のような会話が、二人を出迎える。その真ん中で、新郎新婦は不器用にギターとマイクを構え、どうにか曲を成立させようと悪戦苦闘している。ああ、これは、まぎれもなく「いま」の光景だ。星でも、もしもでもない、選り抜かれた現在。涼子は、そっと鍵盤の前に戻り、アキラは壁にもたれて、その場面を目に焼き付ける。それぞれが、それぞれの場所で。めぐり逢いは終わらず、形を変えながら続いていく。

## 19 ブルノートNYの熱

ニューヨーク、グリニッジ・ヴィレッジ。『Blue Note』の青いネオンサインが、夜の冷たい空気に滲んでいる。開演前のざわめき、グラスの中で氷が溶ける音、微かなバーボンの香り。世界中から耳の肥えた客が集まるその老舗ジャズクラブのステージに、涼子は立っていた。背中の開いた漆黒のドレス。アッぷにまとめた髪。かつてモントリオールの路地裏で肩をすくめ、自分の音に迷っていた少女の面影はもうない。

そこにあるのは、自分の足で立ち、自分の指で世界を鳴らす一人のアーティストの姿だった。トリオのベースとドラムが配置につき、涼子はマイクに向かって静かに微笑んだ。

流暢になった英語で、いくつか前の曲の紹介とバンドメンバーへの感謝を述べる。そして、少しだけ声

を落とし、鍵盤にそっと指を置いた。

「次の曲は、新曲です」

英語から、ふと母国語の響きを混ぜるように、彼女はゆっくりと語り始めた。

「数年前、私はカナダのモントリオールという街で、とても大切な冬を過ごしました。古い石畳の街。真っ白な雪。そこで私は、いろんな人に出会い、いろんな音に出会い……そして、少しだけ大人になることができました。これは、あの街に置いてきた過去の自分と、今の私をつなぐための曲です」

客席が、静かな期待に包まれる。

涼子は小さく息を吸い込み、うつむいた。

首元で、小さな星のペンダントが、ステージの照明を反射してチカッと光る。それはかつてアキラから贈られた、ただ一つの「お守り」だった。鍵盤に落ちた最初の一音は、まるでモントリオールの空から舞い落ちる、ひとひらの雪のようだった。

そこから、柔らかな三拍子のリズムが静かに立ち上がる。

『ワルツ・ア・モントリオール』。

ベースが寄り添い、ブラシで撫でるようなスネアの音が、石畳を歩く足音のように重なる。涼子のピアノは、決して感情を押し付けるような強さを持っていなかった。ただ透き通っていて、どこまでも優しくかった。凍りつくような旧市街の風。

あたたかいカフェの窓ガラスの結露。すれ違ってしまった言葉。言えなかった「さよなら」と、言えてよかった「さよなら」。それらすべてが、三拍子の揺らぎの中で、ひとつながりの風景になっていく。

客席にいる見知らぬニューヨーカーたちも、目を閉じ、彼女の奏でる見知らぬ街の記憶に身を委ねていた。曲の中盤、ピアノがふっとテンポを落とす。まるで、誰かが立ち止まって振り返るような間（ま）。そこへ、一瞬だけ、かつて祐介とともに奏でた『Message to O Montreal』のモチーフが、隠し絵のように紛れ込んだ。そしてそれは、ほんの数小節で風に溶けるように消え、ふたたび美しいワルツの主旋律へと還っていく。過去を否定するのではなく。

未練として引きずるわけでもなく。

ただ「確かにそこにあった美しいもの」として、自分の音楽の一部に溶かした瞬間だった。

（聞こえる？ 祐介、アキラ、優子ちゃん）

涼子は、目を閉じたまま、心の中でそっと呟く。

（私、ちゃんと自分の音で、息をしているよ）

最後の和音が、ブルーノートの濃密な空気の中へ、波紋のように広がっていく。ピアノの残響が完全に消えるまで、誰ひとりとして音を立てなかった。数秒の静寂。やがて、客席の奥から誰かがため息をつくように拍手を始め、それが連鎖して、会場中を包み込む万雷の拍手へと変わった。涼子は立ち上がり、深く、丁寧に頭を下げた。顔を上げた彼女の瞳は、もう遠い過去の街を見てはいなかった。目の前で自分に送られる熱狂と共に向かうべき未来の譜面だけを、まっすぐに見つめていた。

## 20 ワルツ・ア・モントリオール

夜の終わりど、朝のはじまりのあいだにある、あの細い時間帯が、いちばん好きだ——と、涼子はいつからか思うようになっていた。

ニューヨークの夜明け前。ブルーノートの本番を終えた街は、まだ完全には眠りから覚めていない。アパートの窓を開けると、薄く冷えた空気が、指先と頬の間をすり抜けていく。遠くでパトカーのサイレンが鳴り、地下鉄のうなりが地面の下から微かに伝わってくる。それでも空は、驚くほど静かだった。

東の空の端が、ほんの少しだけ白んでいる。まだ「朝」というには心もとない、青と灰色の境目。ビルの輪郭だけが黒々と浮かび上がり、その隙間に、一番星の残りかけた光がかるうじて見える。

窓際の小さなテーブルには、昨夜のステージで客から贈られた花束が、グラスに差してある。白い百合と、薄桃色のバラ。水面には、スポットライトの残像のように、夜の光がかすかに揺れていた。

涼子は、マグカップを両手で包みながら、その景色を眺めていた。中身は、コーヒーではなく、少し薄めの紅茶。ライブが終わったあとの身体は、カフェインよりも、ゆるやかな温度を求めている。テーブルの端には、一冊のノートが開きっぱなしになっていた。さっきまで書いていた楽譜と、ところどころに挟まれたメモ。

「bridge もう少し削る」「モントリオールの雪の音」

「右手メモ、アキラの声みたいになってる」

自分にしか分からない小さな言葉たち。

——モントリオール。

窓の外の空と、ノートの上の文字が、ふっと重なった。あの街の冬の空も、よく似ていた。

青と灰色の境目が細く、長く続き、その向こうから太陽の白い光がじわじわと押し寄せてきた。鼻の奥が痛くなるほど冷たい空気。吐く息が白くなって、笑うと、それがふわりとほどける。

石畳の路地裏。

雪を踏むブーツの音。

古いカフェの木の扉を押し開けたときに、内側から押し寄せる、コーヒーと焼き菓子の匂い。

あの頃の自分は、まだ、音に怯えていた。誰かの曲と比べては落ち込み、自分の指が trickling する和音を、信じ切れずにいた。そんな自分に、「大丈夫だよ」と言ってくれた声があった。涼子は、窓辺から離れ、部屋の片隅に置かれた電子ピアノの前に座る。電源を入れると、暗い部屋の中で、小さなランプだけがぼうと灯る。鍵盤に指を置き、深く息を吸う。

ワルツ・ア・モントリオール。

その最初の音を、そっと鳴らす。

昨夜、ブルーノートのステージで弾いたばかりの曲。照明の熱、観客の視線、ベースとドラムの呼吸。それらすべてが、余韻となって指先に残っている。三拍子のゆるやかな揺れが、部屋いっぱい広がる。

カナダの空気と、ニューヨークの夜明けと、東京での記憶。それらが、混じり合いながら、一つの旋律に溶けていく。右手のフレーズが、高い音の方へと跳ね上がる瞬間、涼子の脳裏に、古びたカフェの窓辺が浮かんだ。

あの夜の、メッセージ。

アキラが、手帳の端に走り書きした、拙い英語と日本語の混じった文章。それをモントリオールのホテルで読みながら、ひとりで泣いた。

「君の音は、ここにいいいい」

そう確かに書いてあった。

——ねえアキラ。

音を紡ぎながら、心の中で呼びかける。私、本当に、ここにいいいいところまで来ちゃったよ。モントリオールからずっと歩いてきて、ニューヨークまで辿り着いて、まだ、どこまで行けるか分からないけど。鍵盤の上で、指先が少しだけ震える。それを、次のコードに滑らせながら、彼女は小さく笑った。三拍子が、少しだけ色を変える。雪明かりのような白から、朝焼けの手前の淡い群青へ。音楽は、いつだって時間の色を変える魔法だ。

曲を弾き終えると、部屋は再び、冷たい静けさに包まれた。窓の外の空は、さっきよりも少しだけ明るい。ビルの輪郭が薄まり、街路樹の枝が、シルエットから質感を取り戻しつつある。涼子は立ち上がり、テーブルのノートを閉じる。

その下には、一枚の紙が挟まっていた。

角がすこし擦り切れた、古い便箋。

そこには「メッセージインモントリオール」と、アキラの癖のある字でタイトルが書かれている。彼女は、その紙を手に取り、窓辺に立った。夜と朝の境目の光の中で、文字がゆっくりと浮かび上がる。

新しいアルバムの、最後のページに。曲のタイトル下、ささやかなライナーノーツとして。それは、涼子とアキラだけの秘密では、もうなくなる。世界のどこかで、そのアルバムを手取った誰かが、ページをめくり、見知らぬ「モントリオールの夜」の一片を共有することになる。けれど、それでいい、と涼子は思う。あの夜の自分に、あのときのアキラが向けてくれた言葉は、きっと、どこかの誰かにとって必要なメッセージになる。

「ここにいいいい」「音を出していい」と、自分自身に言えない誰かの背中を、ほんの少しだけ押すかもしれない。便箋をそっと胸に当てる。

「行っておいで」

小さな声で呟く。

「モントリオールから、世界中へ。私たちの、あの冬の物語」

窓の外に目をやると、さっきまで一つだけ残っていた星が、もう見えなくなっていた。代わりに、薄い雲の向こう側から、白い光がきっぱりと空を押し上げている。

ニューヨークの朝が、始まる。涼子はカーテンを開け切り、眩しさに目を細めた。音も言葉も、ぜんぶ、この光の中で新しくなる。昨夜ブルーノートで弾いた「ワルツ・ア・モントリオール」も、いつか誰かがピアノの前で真似するその日も、この街のざわめきと混じり合いながら、違う姿に変わっていくだろう。

それでも、出発点はいつも同じだ。

あの冬の、石畳の街角。雪の上に落ちた、最初の一音。涼子は深く息を吸い、両手を広げるように伸びをする。

「さあ、行こうか」

窓の外の光へ、そう言って笑う。

モントリオールの記憶も、東京でのすれ違いも、ブルーノートのざわめきも、アキラからのメッセージも、そのすべてを胸に抱えたまま――

今日もまた、彼女は新しい一小節目を書き始める。

## 21 魂のレゾナンス

【メッセージインモントリオール】

親愛なる涼子へ。

実は、はじめて君を見た時から、赤の他人という気がしなかった。

ピアノの前に立つ君を見て、「ああ、これはオレの物語にもともと書き込まれていた登場人物なんだ」と、勝手にそう思った。

沖繩へ旅立った時に、運命を感じた。

あの、海と空の境目が溶けていく夕暮れの中で、「この人とは、きっとどこかで一度は別れて、またどこかで会う」と、まだ何も起きていないのに、そんな未来を予感していた。

その時、オレには詩音がいたから、

お前には素直に「好き」と言えなかった。

出会う順番を、星のせいにした。

出会うタイミングを、過去の傷のせいにした。

本当はただ、自分の臆病さを言い換えていただけなのに。

出会うのが遅すぎたのかもしれないな。

あるいは、早すぎたのかもしれない。

オレたちがまだ、自分の痛みを誰かと分け合う準備もできていない時に、

モントリオールという街が、勝手に舞台を用意してしまっただけなのかもしれない。

だから、他の誰かとうまくいくならば、それでいいとも思っている。

あのギターの男と笑っている君は、確かに綺麗だった。

嫉妬と同じだけの安心を、オレはあの光景からもらった。

君が音のそばで笑っていられるなら、それだけで、オレの祈りの半分は叶っている。

僕は、まだ詩音と祈織のことを引きずっている。

あの夜、救えなかった命と、手放した手の温度を、

未だに星の配置のせいにしてしまう弱い占い師だ。

簡単に誰かと結婚するとは言えない立場だ。

「幸せにする」と軽々しく誓ってはいけない過去を、両手いっぱい抱えて生きている。

しかし――

それでも書かずにはいられない言葉がある。

お前は、オレの運命の女性だ。

命式上の「天地徳合」なんて言葉では足りないくらいに、

オレの魂の癖と、お前の魂の癖は、同じ方向へ曲がっていた。

オレには、お前しかない。

オレには、お前が必要だ。

ブルーノートの暗がりでお前の「夢のワルツ」を聴いた夜、

オレははっきりと理解した。

あの冬の雪も、東京でのすれ違いも、

全部飲み込んで、それでも前を見てピアノを弾いている君を、

オレはどうやって「他人」として見られない。

もし、この誓いが正しいのなら。

もし、星がもう一度だけ、オレたちに同じページを開いてくれるなら。

いつか、オレと結婚して欲しい。

オレの魂とお前の魂は、一つだと、勝手に信じている。

モントリオールの雪明かりの下で震えていた指先も、

東京のライブハウスで汗まみれになって鍵盤を叩いていた手も、

ニューヨークの夜明け前に、一人で譜面に向かっていた肩の線も、

全部まとめて抱きしめたいと、今さらになって思っている。

はじめて言う。

涼子を心の底から愛している。

占い師としてでもなく、小説家志望としてでもなく、

ただの一人の男として。

オレが誰かを愛しているというのは、

これが最初で最後だ。

海より深く。

あの沖繩の海よりもっと深く。

山よりも気高く。

モントリオールの教会の尖塔よりも、高く。

また、星空の向こうへと祈る。

東京のビルの間隙から見える、頼りない星明かりに向かってでもいい。

何度でも、同じ願いを投げ続ける。

お前には、幸せでいて欲しい。

それが、オレの願いだ。

その幸せの隣にオレが立てるなら、それは奇跡だ。

もし立たないとしても、君がピアノの前で笑っているなら、

オレは客席の一番後ろからでも、何度だって拍手を送る。

勝手な男だが、許してくれ。

お前の前から一度は身を引いておいて、遠くからモントリオールやニューヨークのニュースを追いかけ

て、君の新曲に、勝手に自分への返事を探しているような男だ。

それでも、許されるなら、まだ君を好きでいさせて欲しい。

最後に一言だけ。

世界一のピアニストになれ。

モントリオールの冬も、東京の雨も、ニューヨークの夜明けも、

全部まとめて鳴らせる、世界一わがままで自由なピアニストに。

オレは世界一の小説家になるから。

誰かの人生の痛みと救いを、君の音楽がしてくれたみたいに、物語の形で受け止められる作家になる。

その約束が果たされた時には、

オレと結婚して欲しい。

もしその頃、君の隣に別の誰かがいて、君が心から笑っているのなら――

オレはその物語を、ちゃんと祝福する小説を書こう。

それでもなお、どこかでオレを思い出してくれる余白があるなら、

その時は、この手紙の続きを、二人で書いてくれ。

モントリオールの雪の夜も、

ブルーノートの青いネオンも、

東京の狭い鑑定室の窓から見た気の抜けた夕焼けも、

全部ひっくるめて愛している。

その中心に、いつも君がいる。

橋本アキラ

## 22 夢のワルツ

夜の終わりど、朝のはじまりのあいだ。

世界の色がいちど全部あいまいになってから、もう一度塗り直される、その細い時間帯に、涼子はいた。窓の外には、ニューヨークの街の輪郭が、鉛筆で薄くなぞった線のように浮かんでいる。

ビルとビルの隙間を縫うように、地下鉄のうなりが低く響き、遠くでタクシートのクラクションが短く鳴る。空の高いところでは、夜の名残りがゆっくりとほどこけていき、青とも灰とも言えない色が、少しずつ東の端から押し広げられていく。

机の上には、昨夜のステージで贈られた花束が、そのままグラスに差してあった。

白い花びらの縁に、スポットライトの残像のような光がうっすらと残り、

水面には、小さな気泡がゆらゆらと浮かんでは消えていく。

ピアノの上には、開きかけの楽譜と、閉じられたノート。

その間に挟まるように、折り目のついた便箋が一枚、裏返しになっている。

涼子は、その便箋に触れないようにして、窓辺に立った。

指先には、まだ昨夜の「ワルツ・ア・モントリオール」の余韻が残っている。

鍵盤の象牙の感触、ペダルを踏み込んだときの床の硬さ、

客席から立ち上る体温と、拍手の波。

(もう大丈夫だ)

心のどこかで、そう呟く自分がいる。

モントリオールの雪に閉じ込めていたはずの冬は、

気がつけば、ニューヨークの朝焼けの一部に溶けていた。

あの街での出会いも、東京でのすれ違いも、

すべてを飲み込んで、それでも続いていく音の流れ。

目を閉じると、世界がすこし遠ざかり、代わりに音だけが近づいてくる。

ピアノの単音が、まぶたの裏で光の粒に変わり、

それがゆっくりと渦を巻いて、涼子の意識をどこかへ連れて行く。

いつの間にか、彼女は眠りの境目に足を踏み入れていた。

\*

気がつくと、そこには雪があった。

足もと一面に、柔らかな白。

踏みしめると、きゅっ、と乾いた音がする。

息を吐けば、白い蒸気がふわりと浮かび、すぐに冷たい空気にほどけていく。見上げると、モントリオールの教会の尖塔が、夜空に向かって真っ直ぐに伸びていた。ステンドグラスは暗く沈み、かわりに街灯の黄色い光が、その輪郭だけを淡く縁取っている。あの冬の夜と、少しも変わらない光景。

けれど、その中心に立っている自分だけが、少しだけ大人になっていた。

手袋もない手で、コートのポケットをぎゅっと握りしめる。

指先に、紙の感触があった。

取り出してみると、それは見慣れた筆跡で綴られた、一通のメッセージだった。

「親愛なる涼子へ」

声に出さなくても、文字が頭の中で読み上げてくれる。

沖繩の空、東京の夕暮れ、あの夜の告白。

オレには、お前しかいない。

世界一のピアニストになれ。

オレは世界一の小説家になるから。

その約束が果たされた時には、オレと結婚して欲しい――。

読み終わる前に、背中越しに気配を感じた。

「……やっと読んでくれた？」

振り返ると、そこにアキラが立っていた。

いつもの黒いコート、少し眠たそうな目。

けれど、その目の奥には、雪明かりを映したような静かな熱が宿っている。

「夢、かな」

涼子が呟く。

「たぶんね」

アキラは、雪を踏む音もなく、近づいてくる。

吐く息は白いのに、不思議と寒くなかった。

胸の内側だけが、ぎゅっと熱くなっていく。

「ブルーノート、行けなくてごめん」

「ううん。ちゃんと届いてたよ。いつもの、うるさいくらいの応援の気配」

そう言って笑うと、アキラも少し照れたように肩をすくめた。

「手紙、読んだ？」

「読んだよ。何回も、読みすぎて、紙がふやけるくらい」

涼子は胸元の便箋を、指先で軽く叩く。

「勝手だなんて思った。ズルいなとも思った。でも、嬉しかった」

アキラは、雪の上に視線を落とす。

「オレさ、ずっと怖かったんだ。誰かを本気で好きになったあとで、また手放すことになるのが。だから、星の言葉の後ろに隠れてた。占いは外れることもあるって言い訳しながら」

「知ってたよ」

涼子は、淡々と言う。

「でもね、もうそれでいいと思った。怖がりなまま、ここまで来たんでしょ。それでも、こうして、ちゃんと書いてくれたから」

彼女はそっと一歩近づく。

雪の上で、その足跡が二つ、重なる。

「夢の中くらい、素直になってもいい？」

「お互い様だよ」

アキラは、涼子の視線を真っ直ぐ受け止めた。涼子は、胸の中に溜めていた言葉を、ひとつずつほどいていく。

「オレも、アキラが必要。世界一のピアニストになれるかどうかは分からないけど、世界でいちばん、自分の音を信じたいと思わせてくれた人は、あなたただけだから」

その瞬間、遠くの教会の鐘が鳴った気がした。

現実には、きっと鳴っていない。

でも、夢の中の雪空には、確かに音が響き渡っている。

「涼子」

名前を呼ぶ声が、雪の冷たさを溶かしていく。

アキラは、彼女の肩にそっと手を置いた。

どこにも逃げ場のない、まっすぐな触れ方。

「ここでは、全部言ってしまうね。オレは、お前と一緒に生きたかった。同じ家で、同じ朝を迎えて、ピアノの音を聞きながら、締め切りに追われてたかった」

「最悪の生活だね」

涼子が笑う。

「でも、ちょっと楽しそう」

「だろ？」

ふたりの間に、柔らかな沈黙が落ちる。

それは、譜面の余白みたいな時間だった。

音と音のあいだにしか存在しない、けれどたしかに必要な空白。

アキラは、ほんの少しだけ涼子に顔を近づける。

「現実では、もう言わない。言えないし、言うべきじゃないとも分かってる。祐介と優子には、ちゃんとおめでとうって言いたいし、お前にも、お前が選ぶ道を、心から祝福したい」

「うん」

涼子は、静かに頷く。

「だからせめて、ここで一度だけ」

その言葉が終わる前に、涼子は背伸びをして、アキラの唇にそっと触れた。

雪明かりの中で交わされるそのキスは、熱に溺れるためのものではなかった。

選り損ねた未来への、ささやかな手向け。  
もしも、という言葉に区切りをつけるための、最後の儀式。  
数秒。

けれど、その短さの中に、何年分もの感情が折り畳まれている。  
離れたあと、二人は同時に笑った。

どちらの目にも、もう涙はなかった。

「現実の私は、ニューヨークでピアノを弾いてる。モントリオールのこと、東京のこと、全部背負って。それでも、前を向いて弾き続ける」

「現実のオレは、日本で相変わらず星を見てるよ。誰かが迷ったら、大丈夫、外れても人は生きていけるって、ちょっとだけ自信を持って言えるようになった」

「いいね、それ」

涼子は、雪の上に視線を落とす。

自分の足跡と、アキラの足跡が、まるでひとつの譜面のように並んでいる。

「じゃあ、これは夢の中の婚約ね」

「婚約？」

「そう。現実では交わさない約束。でも、お互いが苦しくなったときに思い出せる、もしものための指切り」

涼子は、小指を差し出す。

アキラも、それに自分の小指を絡めた。

「世界一のピアニストと、世界一の小説家。どっちも、夢の中ではもう叶ってるってことにしようか」

「じゃあ、ここで式を挙げないと」

アキラの冗談に、涼子は首を振る。

「いいの。式は要らない。ここは、私たちのおしまいの場所だから」

「……そっか」

雪が、静かに降り始める。

いつの間にか、空は深い藍色に戻っていた。

夢の時間は、もうすぐ終わる。

「ありがとう、アキラ」

涼子は、最後にそう告げる。

「あなたのおかげで、私は自分の音を信じられるようになった。あなたが書いてくれたメッセージは、いつか誰かの救いにもなると思う。だから、これで本当に大丈夫」

アキラは、何も言わずに頷いた。

その頷きに、言葉にならない「さよなら」と「がんばれ」と「愛している」が、全部詰まっていた。

雪の景色が、ふっと薄れていく。

教会の尖塔が遠ざかり、白い地面が、淡い光に溶けていく。

\*

涼子は、ゆっくりと目を覚ました。

ニューヨークの朝の光が、カーテンの隙間から差し込んでいる。

窓の外では、クラクシヨンと人の声が入り混じった、いつもの喧噪が始まりつつあった。

胸の鼓動は、少しだけ速い。

けれど、不思議なほど穏やかだった。

夢の中で交わしたキスも、指切りも、目覚めとともに、優しい痛みだけを残していく。

机の上の便箋に、涼子はそっと手を伸ばす。

折り目のついた紙を、丁寧に二つに折り直し、新しい封筒に入れて、譜面台の横に立てかけた。

「行ってきます」

誰にともなくそう呟いて、彼女はピアノの前に座る。

今日も、弾くべき音がある。

新しい一小節目が、指先の中でじっと出番を待っている。

ペダルを踏み込み、最初の音を鳴らす。

それは、モントリオールでも、東京でも、ニューヨークでもない、

「今ここ」にだけ響く音だった。

こうして、物語は終わる。

けれど、音楽は続いていく。

彼女の指が止まるその日まで。

夢のワルツを。

## あとがき【ワルツ・ア・モントリオール】について

この物語を最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

『メッセージンモントリオール』は、ジャズピアニスト・高木里代子さんの音楽、とくに

「Waltz a Montreal」という一曲から強くインスパイアされて生まれました。

彼女が歩いてきたモントリオール、東京、ニューヨーク。

その道のりを、勝手ながら物語の中で追体験させてもらいながら、

「もしも、あの街角で古い師とピアニストがすれ違っていたら」という仮想線を引いたのが、この物語の始まりです。

正直に言うと、この作品は執筆の多くの部分をAIの力も借りながら仕上げています。でも、誰を傷つけたくないのか、誰に一番幸せでいてほしいのか、

そしてなにより、どの瞬間に「君の音は、ここにいい」と言いたいのか――

その核になる部分だけは、自分の人生と感情からしか出てこないものだと思っています。

モントリオールの雪、東京の雨、ニューヨークの夜明け。

それぞれの土地に刻まれた思い出は違って、

「音が続けたい」「物語を書き続けたい」と願う気持ちは、きっと世界のどこかで誰かにつながっているはず。

もしあなたが、今、

自分の居場所や、自分の音、自分の物語に自信が持てなくなっているとしたら、この小説の中でアキラが涼子に向けた言葉を、そのままあなたにも手渡したいです。

「君の音は、ここにいい。」

この物語が、あなたの背中をほんの少しでもそっと押せていたら、作者としてこれ以上の喜びはありません。

最後に、この作品のきっかけを与えてくれた高木里代子さんの音楽に、心からの感謝を込めて。

モントリオールの夜も、東京の夕暮れも、ニューヨークの朝も、いつかどこかで、あなたの物語と静かに交差しますように。

小説家 橋本昂祈

---

占術師アキラV～Message in Montreal～

---

著 者 橋本 昂祈

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---